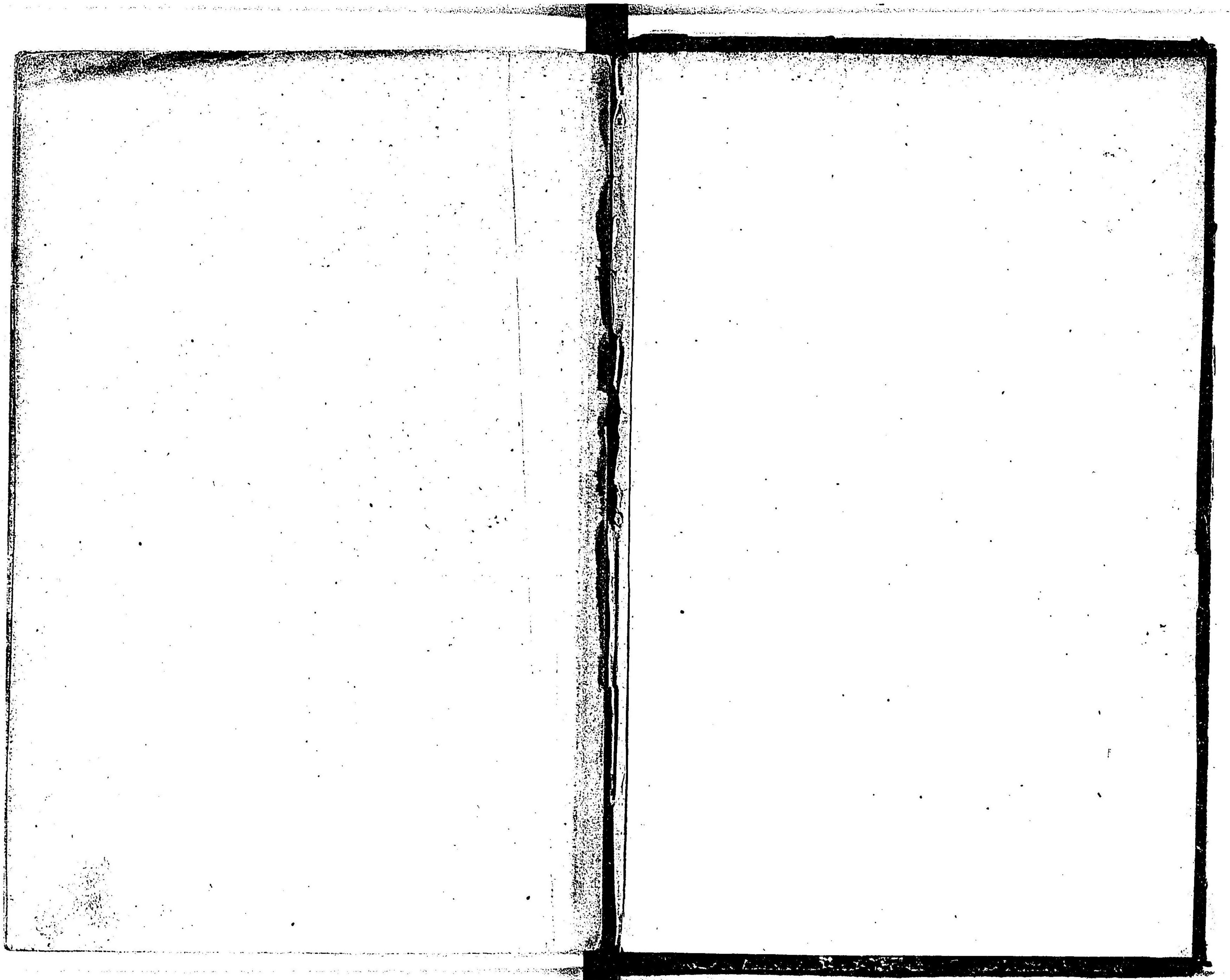


82

387

歐羅巴視察日記



時維明治三十三年五月

佛國巴里府に於て萬國大博覽會開設

言



の興あり我國よりは或は政府よりの命を受け或は団体より
 の選擧より又は己獨力を以て視察上各其専門に應じ續
 々渡航せざるを得余も亦我京都西陣織物同業組合よりの推
 選により余に托するに博覽會並に歐州各國機業上の視察を
 以てす加之農商務省及び京都商業會議所よりの囑托もあり
 發途すること三十三年四月にして全年九月無事視察を了へ
 歸朝せり其間の日程百七十有餘日内凡半ばを往復の汽船汽
 車に費し全く八十有餘日間視察に従事せり之の短日月を以
 て博覽會并に歐州各國の視察を遂げんこと其時日の貴重に

して従つて繁忙を極む實に一刻も容易ならず故に晝間は専ら視察を事とし私事の用務假令ば遊覽又は日記
信書を認む等は成べく之を夜に譲れり然り而して本誌は聊か將來渡歐者の道しるべとも又渡歐せざる人に對しては歐洲各國の一斑を知らしめんが爲の余の微意にして視察の傍少しの時間ある毎に日々記事の要點をのみ摘載し置き詳細なる事項は之れを報告書に譲ることよなせり然れども事實に於て誤謬はなき考なり幸ひにして讀者参考の一端ともならば余の大に満足する所也

明治三十三年十一月

伊達虎一識す

明治參拾參年 渡歐日誌

京都市上京區堀川通寺之内上る四町目
天神北町貳拾九番戸

織物業 伊達虎一

四月一日 在宅

小西善兵衛君今四平兵衛君長澤員矩君樋口利兵衛君いとまごひ暇乞に來らる長尾時春君渡航ワタカヒの相談に來らる午后早々より荷造りに取掛る小西君は午后九時迄荷造りを手傳吳らる

四月二日

午前五二會總「チール」會社工場參觀まつかんす正午に至り會社前の割羹店にて洋食の饗應きようおんを内藤小四郎君より受く夫れより諸家へ告別こつべつに行く午後七時歸る大橋宗助君杉下達三君來らる管野君の來診らいしんあり

四月三日

親類一同暇乞に來らる近親及び家内一統に離杯を酌み交はし午後五時出立七條停車場前橋本屋にて本夜宿泊す今西小西島居榮の三君は宅にて告別の上車を列ねて橋本屋に至り四人同宿す

四月四日 温度六十五度

京都發

午前七時廿一分七條發瀛車にて十時頃神戸着海岸の後藤にて小憩十一時に日本郵船會社瀛船河内丸に投乗す正午十二時神戸港出帆本日は西陣同業者は素より本市知名の士多く七條驛迄見送り呉らる近親及び知已并に久厚會一同は神戸迄見送り呉らる

神戸迄見送人左の如し

- 今西君 鳥居喜君 鳥居榮君 小西君 松室君 諏訪榮君
- 諏訪幸君 磯田君 山田九君 吉田君 久厚會一同九名
- 稻畑君代理 木野宗七君 後藤君 杉下君 田村君 木村君
- 鳥居金君 高林豊君 玄鶴樓 井種 清水雪二人 彌助又造

正午出帆西南の方に進行す五時頃右方に小豆島を左に八島を遠見し六時半頃夜食す十一時迄船客打ち寄り雑談後ち寢に就く船室寢所は四人詰乃ち石黒兒島長尾君及び余なり

四月五日

門司

六時半起床八時門司着二日間碇泊の豫定に付九州鐵道門司發の瀛車にて二日市に行く當日晝飯は折尾驛にて辨當を買取り車中にて食は箱崎神社は瀛車中より遙拜す太宰府天神に參拜す二日市發瀛車にて五時十分博多着中島の榮屋に一泊す同行は西村石田長尾君大阪の高橋君は香港へ行かる

上陸中に船中倉庫より十四五歳の子供一人顯出せし由之れは兒島君方の丁稚にて渡航希望の由にて頑固に隨行したき旨を主張し香港迄なりとも觀光したき由を懇ろに頼み居りしなれども聞入べき限りにあらずれば直ちに送還せしことを歸船の上聞けり之れは四日の事に

て河内丸碇泊中の出来事なり

四月六日 風

博多

九時卅分榮屋を出立す博多市松居元右衛門氏工場視察す十時卅分博多發の漁車にて門司に着此時風雨甚し直ちに郵船會社の小蒸凧にて本船に歸る夜食後「アルコール」「ランプ」にて酒を用ゆ四人

〔附言〕博多機業家は二百五十戸機數六百基織物の種類は風通博

多九寸獨鉗入博多及び小帶

四月七日 雨風温度四十五度

玄海灘

午前八時門司出帆馬關を遠見して進行す此邊景色非常に宜し十時比玄海灘に差掛りし時より波浪高く船の動搖甚し波の高さは三丈位正午十二時迄の船の進行三十二「マイル」なり午后十二時比迄は日本海なれども其後は支那海なり

支那海

四月八日 晴温度 外五十度 内七十度

本日は回顧何れを見渡すも陸地はなし只水と雲となり午前八時食事運動して正午に晝食す船の進行は正午迄二百九十四「マイル」本日も少しく風波高く船の動搖あり

四月九日 靜穩曇温度 外六十四度 内七十二度

六時半起床船の米の方に向けて進行す本日も陸地は見へず正午迄の進行二百八十五「マイル」午後二時比より霧の降ること甚し爲めに船の進行甚遅く五分間毎に漁笛を吹きて衝突を警戒す但し半「ノット」先は霧の爲分明ならず夕飯は日本食なりし本夜は快談壯語大るに愉快なり

臺灣海

四月十日 極靜穩晴温度 午後七十二度 一時内七十九度

六時半起床「パン」と「コトヒ」を食す八時朝食洋食五皿十二時晝食同五皿本日は申の方に向けて進行す正午迄の進行二百三十七「マイル」午後三時より五時半位迄霧濃く三時半に「ゴモク」壽司を供す六時夜食す六時比

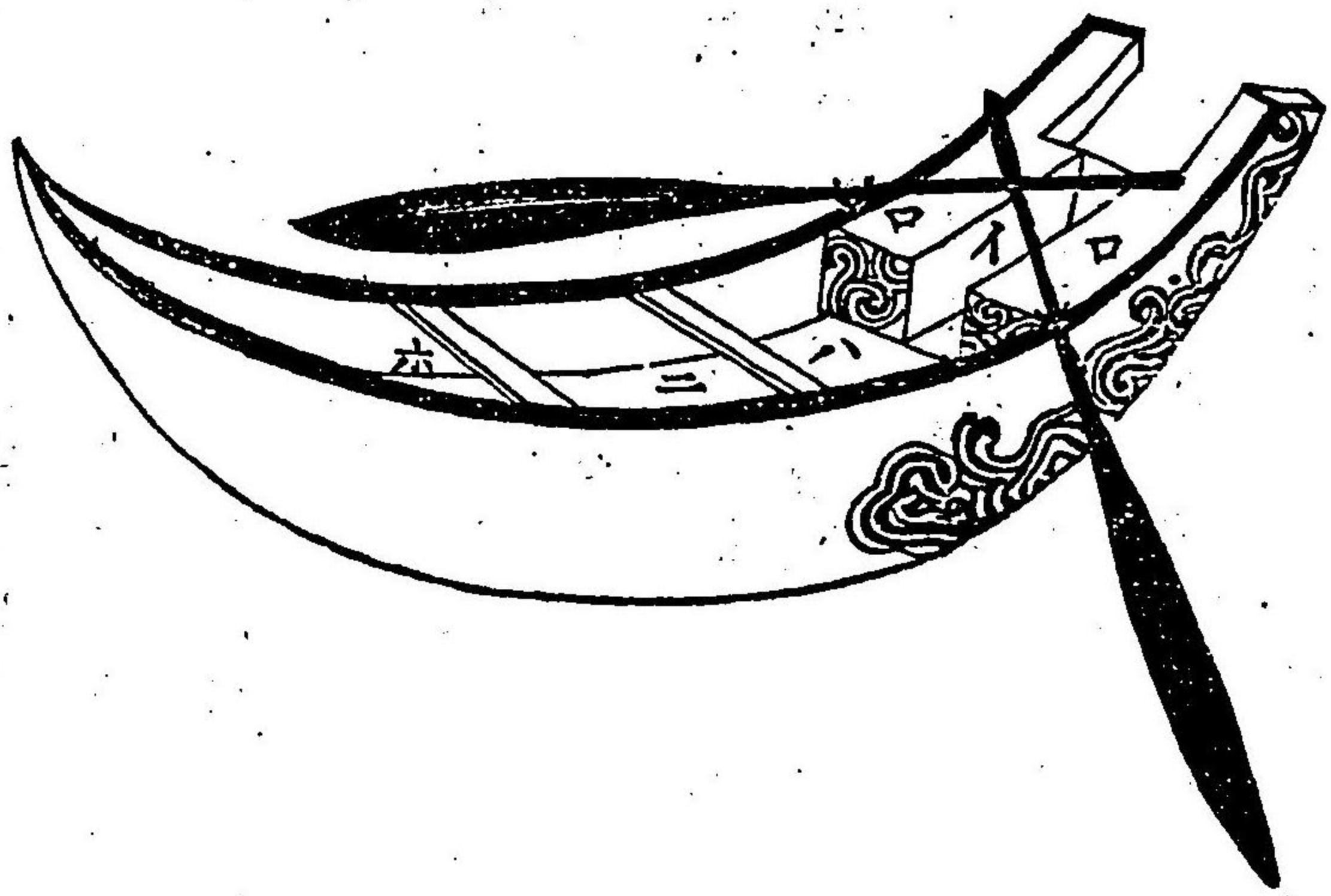
迄は臺灣海暑氣に向ひ白「チヨッキ」を着す午前八時比軍艦敷島に行違ふ
十時より外國荷船を右手に遠見す三時に支那漁船「シヤンク」に出會す
午後三時より二時間計り霧強し

四月十一日 晴温度内七十九度
外七十六度

香港

六時半起床霧一時間斗り本日は南京漁船「シヤンク」處々隠顯蒸氣船亦
多く出沒せり進路は西に向ひ午后四時香港に着す六時晚食後「シヤン
パン」に乗り上陸直ちに日本東洋館に着す當館は生憎空室なし當主山
田君の案内にて日本「ホテル」清風樓に行きて一宿す兵營及び「ピフリヤ
ホテル」を見る

(圖之ンパンヤン)



(圖解)

- (イ) 船頭一人立チナガラ左右ノ
櫂ヲ操ル所ナリ
 - (ロ) 食物等ヲ入レ置ク戸棚ナリ
 - (ハ) 妻子家族ノ居室ナリ
 - (ニ) (ホ) 乗客ノ居室ナリ
- 以上「シヤンパン」ハ船頭一家族
ノ住家ナルカ故ニ日用什
器備ヘサルハナシ
- 「シヤンパン」ハ本船海岸間
ノ通ヒ船ニ用フ又此船ニ
居ル者ハ支那人ナリ
- 「シヤンパン」ニハ圖ノ如キ
極彩色ノ模様ヲ施セリ

四月十二日 曇温度八十度位

午前八時頃より東洋館主山田君の案内にて公園花園と云ふ及び「ケイ
フルカ」諸「ホテル」其他市中を見物す晝飯清風樓にて喫す「チイヤ」興の如
き物又は人力車に乗り領事館を訪問し石氏君に面會す夫れより清風
樓に歸り夕飯後本船に歸る

香港の光
香港は流石著名の港なるが故に諸般の設備完全にして誠に繁昌せり
殊に「ケイフルカ」山に登る瀛車を設けて山上に衆人を導き山嶺を開拓
して公園と爲し「ホテル」其他百事能く整頓せざるなし故に旅客は必
ず此地に遊ぶを無上の快樂とせり

四月十三日 晴温度 午後内八十七度
一時外七十七度

立つ巻
午前七時香港を出帆す十時頃に至れば陸地は少しも見へず目に映す
る者は只雲と水のみ午后五時本船の左舷を隔つる三間斗りの所に突
然立つ巻(俗に龍の昇天することあるへしと云ひ傳へり眞偽は如何か)

起る最初は小盆大の如く瞬間にして張大となり非常の速力を以て伸
張しつゝ、高く天空に入る其狀恰も龍の雲を得て天に沖するの感あり
實に奇觀なり立つ巻が若し船に向ふ時は大砲を放つて之れを打つ適
中すれば之れを切斷するも過つて明中せざる時は船は忽ち轉覆すと
云ふ誠に危険千万なり本日正午迄の進行三十五「マイル」なり途中日本
水雷艇艦に出會へり

四月十四日 晴温度 午後三時 八十四度

救助演習
午前は飛魚澤山水面を飛行す凡そ二三十間恰も鳥の飛翔するが如し
十二時迄南未の方に進行す二百八十七「マイル」午後四時半頃に一齊に
鐘を叩く恰も本邦にて火事の節に打出す半鐘の如し船客一同驚く折
柄水夫は無數の救助船を水面に卸す一同は何か一大椿事の起りしな
らんと皆顔色なし兎角する間に救助船は引上げられ又何事もなし此
間船は少しも進行を止めず依て事務長に問糺せは之れ遭難に於ける

救助の演習なりと嘆聲は忽ち變じて笑聲となる

四月十五日 晴温度^{午后二時}八十五度

本日も四望只雲水のみ午前十時頃右東の方に「ソット」程向ふに汽船と行き違ふ十一時より一時半斗雨降る後霽れ正午迄の進行二百九十七「マイル」なり午后九時に体温を計れば八度なり少々下痢す止め薬を三時間毎に連服す

四月十六日 温度^{午後一時}八十九度^{午後八時}八十五度

午前八時体温七度三分本日も亦水と雲の外認めず飛魚は澤山に顯はる伊藤君に生鹽酸を貰ひ服用す二時頃に右手に汽船二双を遠見す正午迄の進行二百七十七「マイル」なり午后八時試に三ツ星を見れば顛頂より少しく西南の方に認む

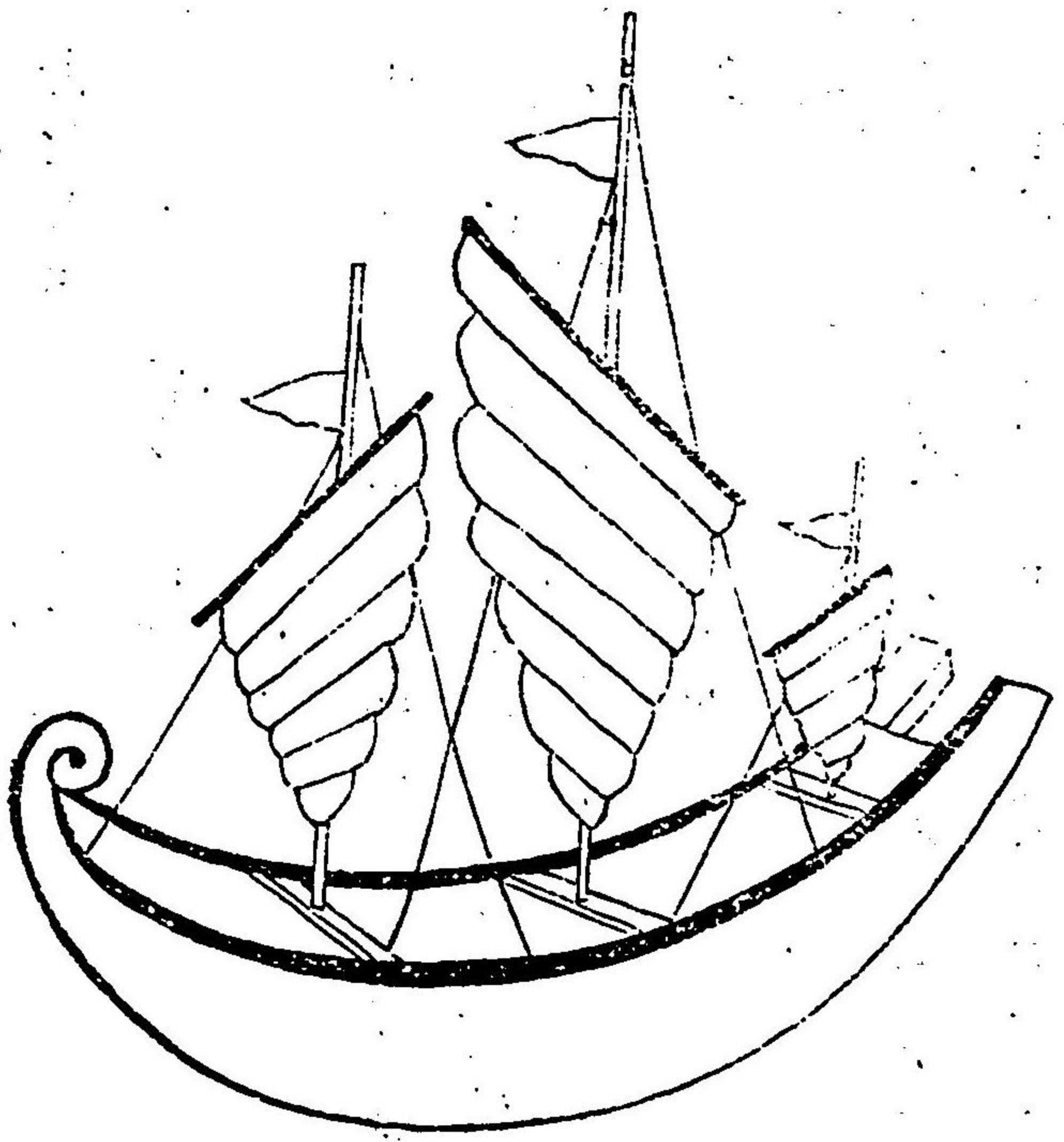
四月十七日 晴温度^{午後二時}八十八度

正午頃に遠く立巻の昇るを見る飛魚は相變らす澤山あり正午迄の進

新嘉坡

行二百七十三「マイル」午後左右に二艘の汽船に行違ふ午後五時廿分頃より右手に島を澤山見る
四月十八日 雨温度^{午後一時}八十二度
今朝は久し振にて一の大陸を見る之れ新嘉坡なり正午新嘉坡港に着す正午迄百七十三「マイル」

(圖之クソヤヲ)



(圖解)

「ジャンク」ハ元來漁船ナレドモ本船ト海岸間ノ通ヒ船ニモ使用セリ

甲板上より港の内外を見る夜景尤も佳なり

新嘉坡人口三十萬内 三分ノ二 支那人
六百人 日本人

四月十九日 晴

午前九時上陸す「シーバンコンシレント」領事館に行く馬車にて「ボタニクガーデン」(植物公園)に行く此内に色鳥もあり日新館にて晝食す夫れより郵便局寫真店へ行く「ベタソンサニモンス、コンパニー」(郵船會社)へ行く直ちに船に歸る暹羅の通貨一個を買求む

○馬來語

一、サトヲ。二、ドワ。三、テガ。四、アンパ。五、リマ。六、アナム。七、トギウ。八、ラパン。九、スミナン。十、スポロ。十一、スプラス。十二、ドワプラス。十三、テガプラス。十四、アンパプラス。十五、リマプラス。十六、アナムプラス。十七、トギウプラス。十八、ランパンプラス。十九、スミナプラス。二十、ドワプラス。三十、テガプラス。四十、アンパプラス。五十、リマプラス。六十、ア

ナムプラス。七十、トギウプラス。八十、ランパンプラス。九十、スミナプラス。百、スラトス。壹圓、サトーレンゲ。十圓、スポロレンゲ。圓、レンゲ。錢、セン。何程か、プラバト。高直、バニヤマハン。負け呉れ、シキカシヨラン。負けぬ、テダボレコラン。食する、マアカー。濟みしか、スダアヒス。あれを呉れ、イニカシイ。行け、ベケ。私がある、サヤマウバレ。店、グタン。南京語店、ケレ。氷、アイバトヲ。水、アイ。石、バトヲ。湯、アイバナ。あちら及
びこちらサナ。「マラユス」
町マラユステレツ。

汽船より通ひ船にて上陸する地点を町名「シヨンスピーヤ」と云ふ

四月二十日 晴温

午後の上陸す「マラユステレツ」へ行く當夜は右の「ホテル」にて一泊す大橋西村兒島内藤石田諸君及び余と六人連なり途中「ラーグスホテル」を見る此「ホテル」は當港に名高き「ホテル」にて我京都「ホテル」の凡そ四倍位あり當地には四人馬車及び二人乗人力車澤山あり

四月廿一日 晴温度^{午后}八十九度

午前「ホテル」出立す晝飯は日新館にて食す午後一時卅分「サンパン」を雇ひ三時頃本船に歸る出帆時間に切迫するにより船友一同は非常に心痛し呉れられたり汽船の出帆する時は必らず二三時間前に乗込むに至當とす四時卅分新嘉坡を出帆して島を澤山遠見す

四月廿二日 晴温度^{午后}九十度

今朝は遙に島を見る汽船も澤山遠見す正午戌亥の方に向て進行す二百四十「マイル」午后四時卅分頃直北に向ふ本日甲板に於て体操を始め

四月廿三日 晴

彼南 午前七時彼南に着す廿四日午後迄當港に碇泊す依て九時卅分に上陸す直ちに「ボタニックガーデン」へ行く山上に瀧あり此水を市中の水道に利用す此公園に使用する草刈用大鎌は三尺斗にて一人にて使用す日本人の目には大に珍奇を感ず「セレナステレッツ」卅七番地雜貨店日本

人山田豊次郎氏方へ行く暫時話しの末「ピヤホール」にて晝食す午後三時に「ジャンパン」にて歸船す午後七時頃に雷雨あり當港の人口は凡そ八萬人内日本人は二百人位あり

四月廿四日 晴温度九十度

當地は椰子の大木澤山あり南瓜の如き實を夥多生す此の實の中には二合斗りの水あり又檳榔子もあり物産は錫と眞珠となり眞珠は外人の目を懸る午後七時出帆す

本日當港に碇泊の汽船は十四五艘あり内一艘は獨乙にて一萬五百噸位なり

四月廿五日 晴温度^{午后}九十度

本日は眞西に向て進行す正午迄二百〇四「マイル」出帆後は又水と雲との外見へず午後一時頃に鐵現はる新嘉坡及び彼南より馬來人澤山に乗込む正午頃迄は「スマトラ」海なり全五時頃より「スマトラ」幽かに見ゆ

「スマトラ」海

四月廿六日 曇温度^{午後}八十八度

西に向て進行す正後迄三百〇四「マイル」四方は水と雲となり本日より

印度海

印度海なり

四月廿七日 雨温度^{午後}八十五度

真西に向て進行す正午迄三百〇二「マイル」午前十時卅分頃丹波丸に行

違ふ本日も四面水雲の外何物も見へせ

四月廿八日 曇温度^{午後}八十六度

西に向て進行す正午迄二百五十九「マイル」本日は少しく荒模様に船

の動搖甚し怒濤は恰も龍の雲に翔くるが如く又猛虎の風に嘯くに似

たり船の上下する七八尺に及ぶ

四月廿九日 晴

古倫母

午前八時卅分古倫母に着す三日間碇泊す午後一時より「サンハン」にて

上陸す電鐵にて「マラダナ」停車場へ行く此所にて印度人の裸踊を見る

午後二時十五分の瀛車にて「カンデー」へ行く此里程七十四「マイル」瀛車

「カンデー」

中「アダムピーク」山を遠見す此山は釋迦の足跡ありと云ふ谷間に螢澤

自然宿

山あり螢を「ミネーファチエ」と云ふ午後八時「カンデー」着直ちに「クヰン

スホテル」に投宿す一行は十二人なり晚餐後十二人連れにて散歩す「ホ

テル」よりは一人の案内者を附す一行の散歩目的は此の土地に遊廓あ

ることを聞きしにより夫れへ行かんと思ひしも案内者に對して躊躇

せしに一行中の一人姉崎君は余は之れより別れて歸るにより案内者

を連れ歸るとして「ホテル」へ戻らる残り十一人は茲に始めて懸念なく進

み行きしに次第に淋しく一向遊廓のある所の様には思はれす兎角す

る内幸ひに一軒の家の未だ門戸を鎖さるあり就きて問ふに曰く此

邊は夜分甚物騒なる所にて十時過ぎよりは誰も外出するものなし然

るに諸君は見受る所皆外國人と覺ゆ甚危険のことなり速かに宿に歸

られんことを云ふ然るに其傍らに一人の涼み居りし人あり其人曰

く我諸君の案内をなさんと余等一行は前の話にて稍恐怖の念を萌し
先の遊廓視察の勇氣は何處へやらにて皆「ホテル」に歸ることゝなし此
所より引返し「ホテル」に向ふて歸る然るに回顧すれば後より我等一行
に附け來る雲突く斗りの大男二人あり余等謂へらく彼れ必定我等の
虚を窺ひ害を加へん心ならんと一行皆戰々慄々顔色なし漸くにして
「ホテル」の近傍なる公園迄歸りしに尙怪しき二人は依然として去らず
益々疑ひ如何はせんと大に困難せし折柄幸ひに一の英國兵の來るに
遇ふ此時一統は恰も地獄にて佛に遇ひし思ひにて取敢へず一行中の
一人は兵士に我等困難の次第を語り我等に保護と與へられんことを
依頼す兵士は直ちに怪しき二人に就きて其附け來る所以を詰る二人
の曰くこは以ての外のことなり我々は一行諸君より一言にても禮を
と受くるも決してさる疑ひを狹まるるが如きものにはあらず我等は
一行諸君の之の淋しき所を然も外人の身にて其上土地不案内の他人

々が其勝手を知れぬことこの氣の毒さに一行を無事に歸らしめんと
義侠心にて附け來るありと云ふ兵士は余等に其趣を話さる然れども
一行は未だ半信半疑なれども聊る心を安め兎に角此所にて日英及び
此土地の人々が偶然會せしことは誠に祝すべきことゝて各國々の萬
歳を唱へては如何との話出で皆賛成にて暗黒界裡に各國々の萬歳を
唱へて跋を附く我等一行は而も大聲にてさも勇ましく唱へたり併し
之の大聲は半ばは「こわさ」半分より出でしならんか夫れより別れて無
事「ホテル」に歸り互に顔を見合せ啞然たり之れ旅行中の滑稽の一つな
り

四月三十日 温度 午後九十度

「カンデ
ー山」

蟻の塔

午前八時半比より「カンデー」山を馬車に乗て廻る此山は海面を抜くこ
と千七百尺釋迦の古蹟を見る又之の山中に蟻の塔を多く見る其高さ
二三尺より七八尺位のものあり之れ日本にては蟻の冬棲息する所は

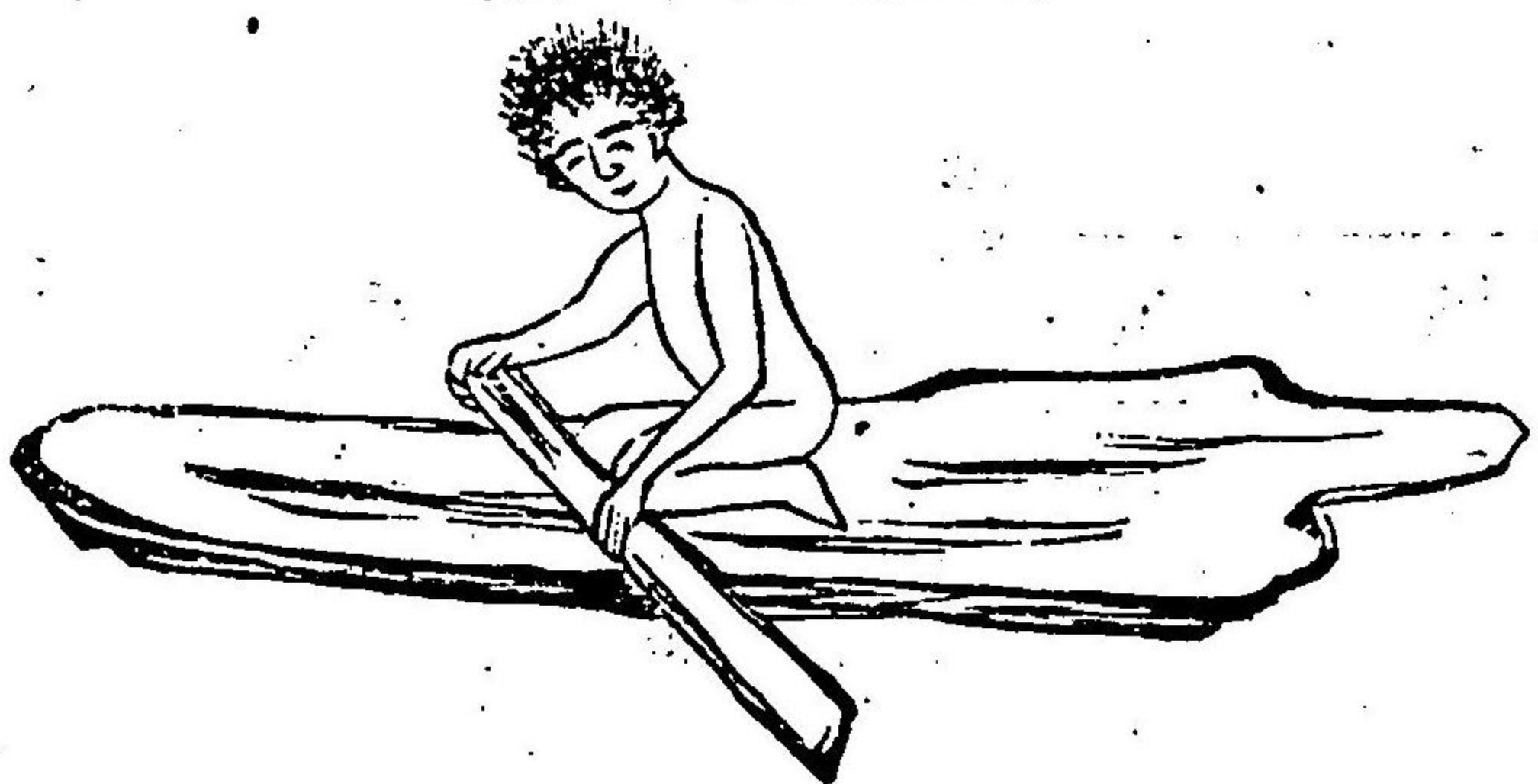
土中深くして之の地方にては恰も夫れと反對に地上高くに其巢を營む斯る反對の現象は余の考ふるに全く彼我氣候の差違より起りしものにて斯く小蟲ながらも各自國の氣候に應じて巢を營むものならんが日本の季候夏は暑く冬は寒きを以て冬籠りを爲すに冬日嚴寒の時と雖土中は自然外より暖なるにより土中深く穴を掘り以て冬籠りの場所となす之れに反し之の地の氣候は夏冬の別なく年中暑きを以て前者の如く穴を掘り冬籠りの必要なし故に只土塊を高く巧に積み上げて以て已れの棲家となせり之れを稱して蟻の塔と云ふ

書食の爲「ホテル」に歸る食後寫眞を買ひ又馬車にて植物園を見る二時半位「ペラデニヤ」發瀋車にて「マラダナ」迄歸る瀋車中より象を河にて洗ふを見る誠に奇觀なり直ちに「サンパン」にて河内丸に歸船す午後九時比より雷雨あり

五日一日 雨温度 午後三時 八十五度

船中より波止場を見れば浪の打上ること凡五丈位波止場の延長約一里間口甘間

余なり新嘉坡、彼南、古倫母、の植物果物は「チーク」(柿の類)「マンゴ」(密柑の類)「パイナップ」(松笠の形に似る)「バナナ」



(圖解)

新嘉坡より向ふへ進むに従ひ圖の如き海乞食の本船の邊りへ來るあり之れは年齢十四五歳斗りの印度の黒奴にして朽木の筏の如きものに乗りて本船の傍に來り「ワンフラ」ン」と呼びて錢を投げんことを乞ふ若し試みに銀貨一葉を水中に投ずれば夫れと同時に海中に躍り入り銀貨の未だ海底に沈まざる内に巧みに拾ひ來る又之の乞食は甚だ氣儘にして銅貨にては拾はず之れは氣儘のみならず銅貨は銀貨の如く水中にて光りなきを以て拾ひ難きに因るならん

五月二日 曇温度^{午后}二時八十五度

正午錫蘭島、古倫母を出帆す成の方に向て進行す午後三時比に左手に
漁船に行違ふ印度洋なり

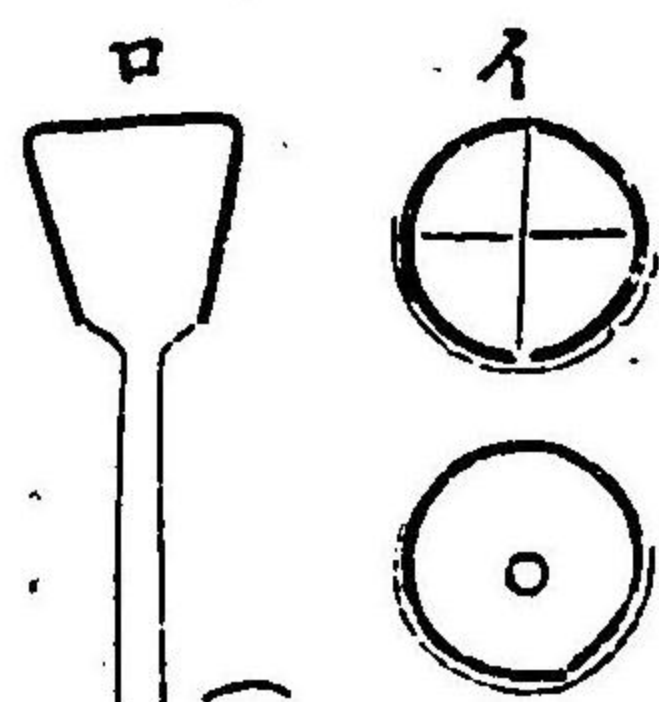
五月三日 晴温度^{午后}三時八十八度

午前甲板に居る右手「ノット」斗り向を外國漁船一艘行違ふ正午迄進
行二百六十七「マイル」午後二時比に英國の軍艦及び一艘の漁船を遠見
す

船中左の遊戯器械の備へ附けあり

ミ	ル	ス	十	〇
六	七	二	九	四
一	五	三		
八				

四	三	五
九	五	一
二	才	才



(イ)は板にして 各四枚宛あり
(ロ)を以て突き入るゝなり

五月四日 晴温度^{午后}三時八十七度

正午迄の進行二百九十二「マイル」明日は端午の節句に付祝宴を開くこ

とを相談す日本人十八人にて諸事設備の分擔を定む會議法に依り年
長者の見島君を座長とし深更迄會議の末各分擔決定す

五月五日 晴温度^{午后}三時八十七度

端午ノ祝宴

早朝より諸般の設備に取掛る余は裝飾分擔に付人形一個を造る男兒
のある者は子供一人に付「ビートル」二本を寄附することに決す本日は南
成方に向て進行す正午二百九十五「マイル」午後四時より宴會を開く外
國人及び船長船員を招待す餘興として各自秘藏の隠し藝俄。手踊。等を
催し頗る盛會なりし散會後意外の壯士的活劇の舞臺となるそは石田
君と伊藤君との口論に始まり終に腕力に及び一時は相互滿醉のこと
とて非常に激烈なりしも結局諸氏の仲裁にて無事和睦するの所にて
幕切れとなれり想ふに此争鬭の偶然起りしも全く本日の軍神を祭る
端午の佳節に因せしならんか

○祝宴順序

第一点鐘 會員入場
第二点鐘 來賓入場

- 一 委員長開會の辭
- 二 唱歌 (皇御國)
- 三 宴會
- 四 餘興
- 五 散會

右

○歌 詞 (皇御國)

すめら御國のものふは。いかある事をかつとむんま。
唯身にもてる赤心を。君と親とにつくすまで。

○全

(河内丸)

今度このたび歐洲行についてね。あまた汽船のある中に。吾が日の本の

郵船に。その名は可愛河内丸。頃は弥生の末の方。ともづな解て横濱を出
て神戸や門司みなど。烟をあどに香港や。新嘉坡や彼南港。古倫母迄印度
洋。赤き道をも恙なく。時は皐月のけふの日は。端午の節てふ祝ひ日にわ
が一行十八人陸み親しみ酒酌みて。互の無事を祝ひけり。ふるさと出る
其日より。數へ來れば三十あまり。其行途も半ばすぎ。やがて彼の地に別
るべく。其目的は異なれど。思ひは一つ國のため。月日にすゝむ彼の國の
學術技藝や文明の。其華摘みて我が園に。うつしてあどに香を添へん。あ
の麗かに馨しき。花を咲して實を結び。其業誰がつとめぞと。をもへば重
き吾くの五尺のからだは。蕾なれ咲く間持つ身は。楽しみよ。勉めよは
げめよ「ソホホエー」諸共に「チエー」

五月六日 晴温度 午后四時八十八度

本日は無事正午迄の進行二百九十八「マイル」

五月七日 晴温度 午后二時八十八度

午前十一時比より五分間斗り雨降る鷹大の鳥の空近く翔くるを見る
其他は水雲の外目を遮る物なし成の方に向て進行す正午迄二百八十
三「マイル」節句の割前二「シルリ」及び「ビー」四本代七十五錢を出金す
午後三時比より海上穩ならず荒模様となる船の動搖甚し

五月八日 晴温度^{午后三時}八十九度

午前七時半比より海面靜穩に復す十時比左方亞弗利加の鼻を見るこ
と三時間斗り亞丁灣なり以後は又々水雲斗り夜分漁船三艘に出會す
古倫母出帆後は暑氣嚴しき故甲板にて寝る

五月九日 晴温度^{午后三時}八十九度

午前十二時比に左手に漁船一艘行違ふ正午迄進行三百〇三「マイル」午
后三時比幽かに亞丁を右方に見る亞丁灣航す南に向て進行午後漁船
二艘に出會す

五月十日 晴温度^{午后三時}八十九度

紅海

午前一時半亞刺比亞の鼻「ヘリミ」と云ふ波止場を遠見す是より紅海に
入る午前七時右手に近く島を見ること一時間斗り鷗澤山游飛す八時
頃外國運送船一艘後より追越せり實に不愉快を感ず此船は十四「ノット」
の速力なりと云ふ十一時半比又一艘の外國船に行違ふ正午迄進行三
百十「マイル」二時比に右手に小さき島を見る航路は凡そ北に向て進行
す本日より五ツ並べの相模を始む

五月十一日 晴温度八十七度

本日は水と雲とを見る斗り午前九時比に外國漁船一艘又々追越せり
亥の方に向て進行す正午二百六十九「マイル」本日は花合せをして「ビー
ル」二本を負けたり

五月十二日 晴温度^{午后四時}八十六度

午前六時比より左手に亞弗利加大陸を幽かに見ること午后四時比迄
午前十時比には右手に幽かに見ること三十分程斗り本日も亥の方に

英人ヨリノ招待

向て進行す正午迄二百七十一「マイル」半海中に海月澤山見える四時より船員の非常救護演習あり右手に漁船二艘極幽かに見る六時三十分入り日を見る又日の前に島を眺むる景色頗る宜し本夜は一等乗込英人より夜會に招待せられ一同と共に八時出席す唱歌音楽等あり中々盛んなりし「サンドキッ」「ビーヤ」等立食の饗應を受け十一時吾が船室に歸る

五月十三日 晴温度^{午後三時}八十三度

午前十一時比北手に兄弟島あり燈臺あり船は亥の方に向て進行す正午迄二百六十九「マイル」午後は島及び大陸を見る漁船三四艘見ゆ此島にも燈臺を設く夜に至り風烈し

五月十四日 晴温度^{午後三時}八十度

蘇西

今朝は左右に大陸を見る午前十一時卅分八角形の大燈臺海中に建設せられたり陸を離るゝこと凡二「ノット」斗り正午蘇西へ着す當地は「ペ

「スエス」運河

スト」の爲交通遮断なり故に上陸すること能はず依て買物もなし午後五時蘇西出帆之れより運河に入る運河の長さ八十六「マイル」幅は凡そ廿間斗り船の行違は誠に困難なり八時比一艘の船に行違ふ後湖に入る

五月十五日 晴

午前は運河通航す八時比二艘の船に行違ふ運河中は五「ノット」の速力より走ること能はず正午坡西土着此所も「ベスト」の爲上陸を許さず船中にて買物す六拾貳錢「カード」四枚拾貳錢印紙一枚三「シルリン」寫真六枚貳拾錢船藝者割前六時三十分坡西土出帆す本日より冬服を着る坡西土波止場より凡そ五「ノット」斗り先の海中に一の紀念銅像の建設あり之れは「レセーブ」氏の像にて此の運河の開拓主なり

五月十六日 晴温度^{午後三時}七十五度

地中海

本日は地中海を航行す戌の方に向て進行す正午迄百九十「マイル」四方

水雲のみ午後一時汽船一艘に行違ふ朝夕は七十二度位なり

五月十七日 晴温度^{午後三時}七十五度

午前七時「クレテヤ」の島を見ること七時間斗り幽かに望む正午迄進行二百九十「マイル」午後三時より「フワストクラス」客運動會を始む二十四人づゝ(つひひ)(網引)一方日本人一方外國人

五月十八日

今朝六十七度本日も四望只水雲のみ馬耳塞へ上陸する者十人にて三人の「ボーイ」「三」「パウンド」の心附をなす岡田及び支那人「アッシュ」には各金拾貳圓五拾錢づゝ村山には五圓なり

五月十九日 温度^{午後三時}六十八度

午前一時三十分伊太利大陸夜景を見る右手に「シツリ」島と遠見す山の中腹より上に煙一面あり之れ有名の噴火山あり今朝六十七度
五月二十日 晴温度^{午後三時}七十度

午前九時比より「エルバ」と云へる島の見ゆること五時間斗り此島は中々面白し左手に「コルシカ」島を見る

五月二十一日

馬耳塞
午前五時馬耳塞の檢疫所迄着十一時に全く馬耳塞に着す二十分斗り甲板に居る内鳥居君小船にて迎に來らる午後十二時二十分比鳥居君船に上る色々相談の上十六人連れにて上陸直ちに「ゼネーグホテル」着鳥居君の案内にて見物す博物館及び「ケーブルカ」天主教公園を見て午後七時比「ホテル」に歸る夫れより食事をなす内藤石黒伊藤の三氏は九時發の夜瀛車にて巴里に行く又能勢君も夜瀛車にて澳國「ウヰンナ」へ行かる其際全君は毛布一枚を「ホテル」に忘れ置かる余は長尾君と同道して停車場迄持参せしに全君は幸ひに未だ瀛車待ちをなし居られしにより渡せり

馬耳塞の人口三十八万口

五月二十二日

「カナペ
ユール」
石鹼製造
場

稻畑君の紹介状を以て鳥居君の案内にて「マルセーユ」「カナペール」と云ふ石鹼製造場を見物す四町四面斗りの宏大なる規模にして單に衣服又は手足を洗ふに用ふる石鹼のみにあらず糸にも用ふる石鹼を製造せり主人は懇切に一々製造の模様を説明せられ尙主人の云はるゝには之の所は何分不潔にて休憩も爲し難く且此邊は港の近傍故我等には遊散船を設く諸君も夫れにて御休憩の上談話をなさんとして余等を案内せらる船は小蒸氣にて内部は潔よく且總て整頓せり先づ主人の室を見るに寢臺等の設けあり次ぎに細君の室次ぎに子供の室尙應接の室と覺ばしき室あり之の室は中央に清潔なる卓子を据へ其周圍は腰掛なり余等は之の室にて「サンパン」の饗を受く其待遇の深切なる聊間然する所なかりき夫れより直ちに「ゼネープホテル」に歸る後全氏の厚意に聊酬ひんとて日本酒瓶詰二本を贈る又寫眞を買ひに行ぐ

五月二十三日

里昂

午前九時廿分發の瀛車にて里昂に行く瀛車中にて晝食す午後二時半比里昂に着直ちに「マダム、ヒュークルセンク、リュウモリエール」五番と云ふ下宿屋に着夫れより鳥居君案内にて市内を見物す

里昂人口三十八萬口

五月二十四日

本日飯田政之助君全多三郎君に面會し夫れより領事館を訪問せり

五月二十五日

午前共和町「モレット」洋服店に行き洋服を眺へる午後は飯田君と全道にて博物館を見に行く全日は飯田君出發祝として里昂滞在の本邦人十人余を招待して晚餐會を催され余も七時半より飯田君旅館へ行く
五月二十六日

一昨廿四日領事館を訪問せし時の話しに鳥居君に學校を休ませ案内

三
せしむることは是迄度々故此度は學校より許さざるべしと依て本日は改めて領事館へ其應對に行く折しも領事は我日本へ來航せられつある留守中にて領事代理一等書記小西君に面會し余の此後各國を巡視するに就ては鳥居君に通譯を依頼する旨を語る然るに小西書記の曰く鳥居君に關しては實は校長よりの注意あり夫は鳥居君は是迄も度々日本より渡航せらるゝ人の案内をなされ其都度學科の進歩も遅れつゝある次第なり鳥居君は今や修業の大切なる最中なるに斯く休校打續くことは本人の爲將來は斷然許可なし難き由を話さる余曰く誠に尤もの次第なり然れども余に取りては突然のれ話にて甚迷惑を感ず鳥居君の是迄案内されし人は皆日本にての知己人に止まりしが余は之れに反し親族にて而かも日本を出ずる際鳥居君の親父と篤と示談せしに親父の曰はるゝには幸ひにして各國を案内しつゝ巡ることを得ば一は本人の經驗ともなること故是非同伴せられんことを

望むとの承諾あり旁々以て余は鳥居君を今迄充分心當てと爲し居りしなり若し如何にしても學校より許可されざる様なれば今日にても適當なる代理の人を捜さざるべからずと云ひしに小西書記曰く萬一斯る場合ならば適當なる人の周旋も致さんが併し兎も角一應校長に面會して其情實を語るゝに如かず余も同道して可なりと依て明日小西書記同道學校長に面會に行かんことを約して歸る
尙本日は飯田政之助君九時二十分發の瀛車にて巴里へ出發せらるゝに付停車場迄見送る

五月二十七日

「サンダ
ヨニー」
の語學校
本日は余禮服着用前日約せし通り小西書記同道早朝より校長へ面會に行く道は殆んど一里許其間電鐵の便あり余等は上等に乗り込み行く校長は幸ひ在宅にて面會を遂げたり先づ鳥居君は只今親族の挨拶に來りし旨を申入らる余は小西君の通譯にて初對面の挨拶より鳥居

君の世話にならるゝ挨拶を述べ次に余の今回鳥居君を同伴するに付きては其道中決して本人の不爲めとなることは申に及ばず是迄學校の御指導上の防げとなる如きことは爲さず本人に對しては修學的旅行ともなり余に取りては親族の間柄故他人と同行するとは萬事に心も措けず層一層の便利を感ぜ實に相互の利益を謀らんとてなり何卒拙者を信用ありて一兩月間本人を余に托せられんことを望むと校長の曰く實は鳥居君は是迄度々の案内にて爲めに學科も遅るゝのみからず豫て本人又は修業中と成べく巴里の如き都會の華修なる風俗は見聞せしめず只々専心一意修業を事となさしめんと懸念もありしが貴殿のね話を聞き思召の点は委細に了解し且安心せり然らば貴殿を信じて今回に限り本人を任せ申さんとて快よく承諾を得漸くにして希望を遂ぐるに至りしなり併し之の校長との談判にて余は校長の其子弟を教導するに嚴正にして且慈愛なること率いて學校に對

し大に信用を傾けたり談話後校長の案内にて校内を參觀し併せて他の職員の方々にも挨拶をなせり

右學校の所在地は「サンヂョニー」と云へる片田舎なり

學校を出づれば晝前にして歸路洋服「セヒロ」の假縫合せに行き午後は「フルヒェール」と云へる山へ行く之の山上に寺あり「ノートルダム」と云ふ又高き塔あり夕飯後は竹田君の案内にて石田長尾君及び余と三人日本にての所謂(寄せ)を見に行く

五月二十八日

午前鳥居君の案内にて「オルミリーユ」と云ふ機織屋へ行き種々参考の資を得次ぎに洋服屋へ假縫合せに行く領事館小西君より晚餐會招待を受け七時三十分全氏の官宅へ行く十一時比石田君を旅館に送り余は「モリエール」に歸る

五月二十九日

「クルワ
ロース」

午前飯田多三郎君の紹介にて「クルワロース」織屋を廻り數多参考の料を得たり本日より菅君入學す

五月三十日

本日も前同所へ行き機業上有益なる事項に接し大に見聞を博めたり
五月卅一日

本日も尙前同所へ行き見殘せし所を廻り夫れより夕食は「ヘルデー」と云へる料理屋へ洋服屋の手代全道にて行く之れは見本裂を手に入れんが爲手代に小裂の蒐集を依頼せんが爲なり

六月一日

織物學校

午前鳥居君の案内にて織物學校を參觀し副校長に面會す全君は懇切に校内の狀を説明なし尙校の細則の記載しある印刷物を與へられたり其校は我京都染織學校の如きとは大に異なり諸種の斯新ある機械を備へ附け生徒をして其機械に就き一々實驗せしめつゝあり故に機

業家は之の校を信用して競ふて其子弟を入學せしむ
六月二日

染工場

織物の視察は本日迄にて大半盡せしを以て本日は視察の方面を轉じ染物を視察せんと欲し先づ「マルナス」といへる染工場を始め其他大なる二三の染工場を縦覽せり我國にては染屋と再整屋とは別々になり居るが外國にては總て染と再整といふ附隨せしものにて同一の家にて爲せり故に染工場へ行けば再整も共に縦覽を爲し得るなり

里昂にての視察は今日迄にて一先止め残りは歸路に讓ることとさせり元來余は巴里博覽會視察が主なる目的なるを以て明日よりは巴里へ出立の準備を爲すことに決す故に鳥居君は一應學校に歸り其趣を校長に告げて暇乞をも爲したく且衣服等の準備も爲さんが爲午後四時比より學校に歸り明朝引返すとて學校の下宿に歸らる

六月三日

本日は巴里行荷造すること三時迄鳥居君は午後學校より歸る五時比より竹田君の案内にて「シャルボニエ」へ行き全所にて夕飯を食す後夜景を見て歸る

六月四日

本日は弥此の地を出立すること故領事館へ是迄種々盡力を受けし挨拶に行く其後は終日出發の仕度に取り掛る午後七時廿分發の汽車にて巴里へ行く此の時見送り呉れられし人数名あり

六月五日

巴里着
午前六時比巴里に着す直ちに大澤君の下宿へ行く一行中の石田長尾兩君は大澤君と同宿せらるることとなり夫れより石田長尾鳥居君と余の四名は大澤君の案内にて丹羽西村兒島三君の宿泊せらるる「サン・トラーレ」ホテルに訪問し此の所にて各別れ余は鳥居君と二人飯田政之助君廣岡伊兵衛君北村太三郎君の宿泊せらるる「諏訪ホテル」に行き

三君に面會の後余も同「ホテル」に宿泊することとなせり飯田政之助君とは豫て同道して博覽會を視察し互に研究せんことを云ひ居りしに
より尙此所にて博覽會同行を約す

巴里人口三百萬口

六月六日

午前飯田鳥居兩君と余の三人博覽會へ行く第一織物部を遂一熟覽の上互に研究しつつ終日取掛る之の日の晝食は館内にて爲す

博覽會
織物部
博覽會入場切符の

博覽會入場切符一枚といへば一法なり又切符を富籤的になし廿枚乃至五十枚を買へば其内には何程かの當り金の籤を入れる故に此の土地の人は其籤に當らんとて多數の切符を買ひ籤を取り除きし後の切符を門前にて賣る故に當り金の多き籤を取らし者の切符を買はば其價從つて安し余も一枚五十「サンチ」にて買ひしことあり又入場時間は午前十時迄は陳列品の掃除等を名として入場を許さず併し之れとて

も場内の混雑せざる内に緩々熟覽せんと欲せば切符二枚を所持すれば特に入場を許可す又出品人に限り其者の寫眞を携帯すれば無切符入場を許す余も寫眞の手續きの出来し後は無切符にて入場せり夜の縦覽にも切符を要し場内の大通り、庭園、夜會物の陳列室、を縦覽せしむ時間は十一時比迄なり

六月七日

裝飾部

本日も前日と同じく三人研究の爲博覽會裝飾部を終日見る總て歐米の室内裝飾品としての上等は「ゴブラン」其大部分を占む故に之の裝飾部に於ても悉く「ゴブラン」と云ふも敢て過言にわらず併しまゝ「ゴブラン」に眞似たる織物もあり之の部の縦覽了りし後歸路館内の庭園に設置したる月世界を見て歸る

六月八日

「コロンプ」下水會社

本日は京都市役所助役大槻龍治君「コロンプ」と云ふ所の下水會社へ視

察に行かるゝに付き余等に同行せんことを誘ひ呉らる依て従ひ行く全會社は蒸氣力を以て器械を運轉し市中の下水を分折なし居る會社なり其仕掛の宏大複雑なる實に目を驚かす斗りなり今其仕掛の概畧を述べんに機械の力を以て市中の下水を面積凡そ一段程もあらんと覺ゆる溜池四箇所に集め取り其池の上方には恰も我國にての(ツカミ)の如き形をなしたる大なる器械の設けあり其器械は上より徐々降り來りて池中に入り水底に沈澱せる塵芥をツカミ漑へて又漸次上方一定の所迄上り其所にて(ツカミ)は自然に開きて塵芥を車の中に入る其車は人夫が他へ運搬し其塵芥の燃ゆべきものは焼き又肥料となるものは撰り分けて肥料となせり斯くして池底の塵芥を漑へ盡くさを其後の泥水は河の邊にて又水ゴシ器械と覺ばしきものにて濾過し清水は河へ返へし最後の泥水は田畑の肥料となせり斯く一は市中の衛生に留意し一は廢物をして洩さず利用なすことに注意せり之の會社參

廢物利用

觀の一行は左の八名なり

大槻龍 治君 西村治兵衛君 中井三之助君 全店員

石角喜三郎君 兒島定七君 鳥居精三郎君 余

「チャリ子」

夕飯後市内を散歩し繪本を買ひ又「チャリ子」を見物す之の「チャリ子」は是迄我國へ渡來せし如き比には非ず其演技の斬新巧妙にして且意外なる觀者をして實に驚嘆せしむ今其一二を述べんに今迄種々の技を演じ居りし舞臺の瞬く間に一變して深さ凡そ一丈乃至二丈程の池をあり其中へ多くの人の各馬に跨がりたる儘高さ所より飛び込む之時人も馬も皆水中に隠れ暫くして此處彼處に浮び上り水中にて種々の技藝を演ず其熟練せること水中の技とは思はれず人も馬も能く馴れ合ふに感ず又池の中へ猪を追ひ込み置き數多の洋犬をして之れを追はしむるが如き尙目新らしき演技少なからざりき

六月九日

午前博覽會に行く飯田君と同道里昂染物陳列の内に金「モール」琥珀奎出し等あり誠に面白し午後五人連れにて裂見本屋へ種々の裂標本を集めに行く其裂見本屋の所は左の如し

「リユニデューセス」十番「クルウド」

六月十日

本日は大澤長尾鳥居君と余の四人連れにて市外の大公園に有名なる競馬の催あるを見に行く聞く所によれば之の競馬を見に行くに婦人方は皆競ふて服装を飾るが土地の風習となり居れりと故に余等に取りては好機失すべからずとて今日こそ泰西婦人の種々の盛装を爲せし風俗を見以て流行の一端を窺ひ参考の資料を得んと思ひ早晝食を済し馬車に飛び乗りて行く場所の手前凡三十町程の間は乗せ來りし客を待つ馬車にて道路の両側を填む先づ其盛んなるに驚けり余等の馬車も済む迄待ち居ると云ふに任せて待せ置きやがて場内に入る然

大競馬

るに其觀覽料は一人分廿法と云ふ余等は思ふに元來競馬如きに斯く高價の觀覽料を取るに拘はらず之の雲霞の如き多くの人の來觀せらるゝことの不思議に堪へざりしが後に至り其疑は全く氷解せりそは競馬を見るが主なる目的にはあらずして之の競馬を利用して富籤を爲すにあり今其方法を想像するに假令ば白馬なれば五法黒なれば十法といへるが如く豫め價値を定め置き其切符は場内の此所彼所に恰も瀛車の切符を賣る如き場所ありて其所にて客は已れの思ひくりに白又は黒の切符を買ひ置き見込み通り勝を制すれば夫れに對して幾らかの當り金を受取るが如き方法なり競馬始まるも觀覽人の多くは却つて競馬を見ずして皆隨意散步せるなり又競馬を見る人もありて扱全く了れば已れの見込みの當り大勝利を得し人は意氣揚々としく切符引換に當り金を取り附けに往くあり又見込の外れし人は失望落膽の風に其儘歸る其觀覽人中には紳士貴婦人の多く來觀せらるゝ

を見受く競馬了りて場外に出づれば前述の如く數百の馬車故何れを之れと見定め難く殆んど因却せし折柄斯る所には一二法の貨錢を貰ひて馬車を搜すことを業と爲す者あり其者余等の舉動にて察せしものか前に來りて馬車を搜がし來らんとて往き暫くして歸り來り如何に搜すも到底分らず全く馬車は歸りしならんと思はると云ふ故に余等も詮方なく徒歩歸らんとて尙兩側を見つゝ歩行するに場所より遙の彼方に約せし通り余等の馬車の待つあり是に於て余等謂へらく僅か馬車の一賤夫すら歐州人は斯く約を守るに誠實なること我國人に比し實に慚愧に堪へざりき

本日夕方よりは大澤君の案内にて余と二人博覽會夜景を見に行けり
六月十一日

本日鳥居君は谷口平三郎君歸朝せらるゝに付土産物買集めに行かるゝ周旋の爲めに同道せらる余は長尾君と全行博覽會を視察す午後六

時より「オペラ」(我國の演劇)を見物す先づ劇場内外の状より述べん其建築の宏大壯麗なる到底劇場の觀なく内部に入るれば恰も宮殿寺院に在るの心地せり四面或は彫刻其他裝飾に美を極め二階に昇る階段等に至る迄皆大理石を以てし光耀燦然としく目を眩する斗室なり其他運動場又は喫煙室等の設ありて一も間然する所なく人をして一の神聖なる樂園に遊びつゝあるの感あらしむ之の劇場は國立劇場にして政府の保護を受くるとかや余等も豫て歐州演劇の我國の演劇と大に其趣を異にせることを聞きつゝありしにより一度は經驗の爲とて五人連れにて一統禮服を着用して行き十二時退場歸宿せり其觀覽料一人分三十法にてありき

扱之れより聊か演技者の品位并に觀覽者の着眼点に付我國と歐州との差点を論じ以て演劇其物の「オフネーチユア」(感化力)が社會に對し如何なる現象を來たすかにつき一言せん先づ演ずる所の材料は彼我敢

て異なるなく所謂勸善懲惡を以て基礎と爲し然して道德的模範となるべき事蹟を演じては善行を勸め時に或は不忠兇惡なる非行を演じて其未路の憫むべく而かも全からざる所以を示し以て非道德的の念を未發に防ぐ然れども其折角の好材料も之れを演ずる者の品位如何によりて觀者に感動を與ふるの勢力大に異なり又觀者に於ても其演技の内容を觀察する方面によりて毒藥ともなり又藥ともなる要するに演劇の主眼は演技者の品位と觀覽者の着眼点の二者相並行して始めて演劇其物の眞價の顯はるゝなり彼の歐州に於ける演技者は先づ我身を神聖に保ち其品位高潔方正にして已れ社會の指導者を以て天職となす故に演技者に對する社會の感情は恰も己れを神聖に導く「ゴット」(神)の如く無上の尊敬を以て禮遇せり従つて觀覽者の着眼する所も演技の巧拙等は第二に置き主として演ずる所の内容を觀察し夫れによりて我身に反省し以て自己の行爲を矯正せんとするにあり故

に時としては高貴の人の臨場を忝ふするあり又観覧者は皆禮服着用して観覧中は少しも雑談冷語の聲なく極めて靜肅に而かも飲食は勿論猥りに喫煙だにするものなし時々十分間程の休憩時あり之の時間には運動場に出で、隨意運動するあり又喫煙せんとする者は喫煙室に於て爲す等其規律の嚴正なる驚くに堪へたり翻つて我國俳優の裏面を觀察するに縷々論ずる迄もなく多くは其品位や下等婦女子の玩弄物を以て自ら甘んじ其行ひや實に開くさへ嘔吐を催す斗りの嬉行を以て聊か愧づるなく否寧ろ名譽功績の如く考へ社會よりは度外視せられつゝあり如斯して如何なる好材料を演ずるも如何でか觀者の中心より感動を惹起し之れを神聖に導く如き高尚なる事業の爲し得べくして可ならんや又觀覧者の内に於ても時に或は俳優其物は敢て眼界に置かず能く其演技の内容を觀察し以て善に進むの導火と爲すあるも其多くは内容を第二に置き先づ俳優其物の如何並に技藝の巧拙等を主とせるの傾あり是に於て乎彼我演劇の進度の實に月籠も管

な少ざるは瞭々として明かなり彼れ歐米の社會一般徳義の進みつゝあるも決して偶然には非ずずして演劇其物の感化力亦大に與かりて力ありと謂ふべし蕪言を録して讀者の一覽に供す

六月十二日

本日は巴里第一なる繪本屋へ行き織物参考用の繪本を買ふ又食事後廣岡君の案内にて特別寫眞を買求む

六月十三日

午前「ゴブラン」と云へる土地に行き全所の國立「ゴブラン」織製造場を參觀す之の製造場は毎水曜日に二時間を限り縦覽を許せり「ゴブラン」織は世界の美術品にして之の土地の名を取りて織物の名稱となせしなり此所を出で、其近傍なる「ゴブラン」織屋にて全織物に對する参考品並に「ゴブラン」を寫せし寫眞等を買ひ午後は去る九日に行きし裂見本

屋にて飯田廣岡君余と三人てに買ひ置きし裂見本参考品を全上三人分配すること取掛れり

六月十四日

午前大澤齋藤兩君の旅宿を訪問し直ちに銀行へ取附けに行きしが巴里には正金銀行の支店なく他の銀行にては取扱をなさず故に巴里何れの銀行にても自由に取附け得る様の取計ひを爲し呉るゝ様に里昂の正金銀行支店へ向け照會せり

六月十五日

本日飯田政之助君北村喜兵衛君廣岡伊兵衛君の三氏は米國に向つて出立せらるゝに付「ホテル」にて告別して分れ後博覽會に行き場内にて伊澤君に面會し夫れよと同君の案内にて「ナイザ」系(作蠶糸に似たる糸)「ベルド」器械及び廿四を一時に織りつゝ針を抜く金華山織器械を參觀す此器械は日本の襟地又は小兒帶腰帶等を織るに利用せむ大いに裨

益あらん

六月十六日

「エフェ
ール」の
高塔

本日は博覽會織物部は一顧通覽せしにより場内に於て午后四時比迄織物の取調に従事せり後有名なる「ツールエフェール」と云ふ金屬構造の塔に登る高さ三百メートル「國三尺三寸三余」頂上よりは巴里全市は勿論接近の諸國皆一望裡にあり途上の人馬は實に寸馬豆人と云ふ奇觀なり登塔料五法塔に登るには「エーペートル」と云ふ器械に瞬間に引き上ぐるあり之の器械は高處へ眞直に引き上ぐる器械にして之の器械を運轉するには水力。蒸氣力。電氣力。空氣力。等種々あれども此所の器械は空氣力を使用せり後直ちに「ホテル」に歸り石田大澤兩君に面會し(幾)と云ふ日本食屋に行

六月十七日

美術館

午前美術館を縦覽す庭園には數多の石塑彫刻出陳せらる是皆美術家

の丹精に依て成功せしものにして殊に孰れも偉大なるは邦人の夢想
だに及ばざる所ならん館内は多く油繪を出陳し彫刻も少しはあり夫
れより植物園に轉じ古巴里の風俗を通覽して午後二時比「ホテル」に歸
る

美術館の出品國別は左の如し

瑞西。伊太利。魯西亞。「ベルギー」。「葡萄牙」。

亞米利加合衆國。日本。

六月十八日

午前下郷君全道にて裂本屋へ行く晝食后「ルーブル」に行く綿「ゴブタン」
其他買物して六時比に日本食屋に行き此所にて始めて稻畑君に面會
す余は今回全君には一方ならぬ世話を受け居且余の里昂を出立する
際より一日も早く同君に面會したく思ひ居りし事も掛け違今日迄會
晤することを得ざりしに漸くにして此所にて面接することを得たり

依て兎に角同君と概ね種々の相談を濟し又同君よりも種々の談話を
聞けり余は今后大に心健かに覺るたり

六月十九日

長尾君を誘ひ丹羽君の下宿へ行きしも不在に付直ちに博覽會へ行く
會場にて中井君に面會し紋紙のことに就て研究す「パンサンデー」機械
出品者に就て左の件を問合す

○紋鑿器械四千八百法。○紋紙切器械五百五十法。

○「パンサンデー」機械口數は六百の口 九百の口 千二百の口
千八百の口

一時比丹羽君に面會し審査のことを相談す夜食后「サントラール」ホテ
ルの西村君下宿へ行く西村君下宿にて偶然大槻君に行き合ひ面會せ
り大槻君は機械の審査官故日本箴に就て自身不明の廉を余に糺さる
依て余は充分の説明をなし同品に對し審査上の材料を與へたり

六月二十日

本日は絹織物審査にて博覽會日本部に長尾鳥居の両君及び余と五時迄詰居る之れは我西陣地方の出品に對し大勝利を期せんが爲説明又は何かの注意上詰居りしなり農商務省商工局長木内君其他四五人六時二十分停車場御着に付出迎に行く夜食後稻畑君下宿へ行く其所在地は「リユウデーマーティー」卅二番

六月廿一日

本日は審査打合せの件に付丹羽君に面會出品協會へ二度行く

六月廿二日

本日は室内裝飾部の審査に付彼是説明又は注意の爲博覽會に四時半迄迄居る

「イスパニヤ」出品を見る又「スイーツル」「オノイケ」(名)機械出品者に就き左の件を問ふ

○緯巻器械十本合せ器械價五百五十法

右出品者本店工場縦覽の添書を依頼し承諾を得

夜分伊澤君下宿に行く同君は買ひ集められたる色々の見本糸を示し我西陣に應用し得るや否やの問を受く

六月二十三日

本日は審査後にて陳列錯乱せしを以て更に出品陳列整理の爲會場に行く手際に里昂出品の裝飾の陳列上の模様を見物す之れ我出品の陳列上に對し参考となさんが爲なり

午后稻畑君に面會す全君には今后歐州視察上につき質問もあり又全君經驗上の注意を受け度故と以て全道にて日本食屋(幾稻)へ行き十時比「ホテル」に歸る

六月二十四日

本日は足に靴すれの生せし爲引籠る伊澤君來らる其節歸路は同道に

て米國に立寄ることを話す長尾君は——鳥居君を誘ひ他出せらる晝食は伊澤君と共にす午後就寤す

六月二十五日

本日は氣分悪しけれども鳥渡博覽會場に行き直ちに歸る

六月二十六日

本日も病氣の爲就寤す夕方稻畑君及び伊澤君見舞に來らる

六月二十七日

本日も不快なれども食事後推て博覽會場内日本金堂に陳列の本邦出品古物を見直ちに歸り寤に就く

六月二十八日

本日は醫師を聘し診察を受け服藥す諏訪「ホテル」は日本旅宿加之全主人は三十年來此地に居るを以て従つて彼我の事情に精通せり依て醫師の應答其他余の病中の食事（假令ハ爾の如き）に至るまで他の洋館にては到底

電信郵便

自由の爲し能はざることに大に便宜を得たり本日は余出立につき豫て博覽會の事に關し種々盡力を受けし我京都紳士の方々を招き告別を兼ねて日本料理にて會食す其會食者は丹羽大槻西村齊藤稻畑大澤の六君并に鳥居長尾君と余となり其總費用百六十法
右宴會の節各紳士方への招待狀は電信郵便を利用せり之れと地中に鉄管を布設しあり空氣の力によりて市内何處を問はず自由に郵送す其配達に要する時間は凡三十分間あり

六月二十九日

今朝博覽會事務官長林忠正君を訪問す此時刺繡の卓子掛を贈呈す之れは全君には種々盡力を受けし廉もあり且告別の意を表せしなり
其後稻畑君に出會す一時二十分巴里の北に當る停車場「ガルドノオール」より發す此時中井石角西村長尾の各君の見送りを受く「リール」迄行く
五時着直ちに停車場内の「ホテル」に宿す停車場内の「ホテル」は種々の便

巴里出立

宜^キあればなり本日より石田兒島鳥居余の四人連なり

六月三十日

「リール」
「ツウル
コアン」

本日は三法の案内者を雇ひ「リール」の機械鉄工場を巡^{じわん}覧す後「ホテル」に
歸り晝食後二時二十分「リール」發の流車に投^ぞじ「ツウルコアン」へ行き全
地織物學校を縦覽す夫れより高力君に面會し全君の案内にて當地物
産二三品を買求む全地は日本にて所謂田舎^{いんや}のことにて織物は多く綿^{めん}
織物を製織^{せいしよく}せり其後電車にて「ルベ」停車場迄行く着後馬車に乗り「ル
べ」公園及び植物園を見物し七時三十分「ルべ」發の氣車にて「リール」
迄歸る「ツウルコアン」の人口凡十萬又「ツウルコアン」より「ルべ」に送^そ入す
る煙草及び食物に對^{たい}しては入市税^{ぜい}を要^ます

七月一日

今朝は一法「カフェ」を濟^たし「リール」博物館へ行き四法にて全所の寫眞畫
を買求め「ホテル」へ歸る「ホテル」内にて四法五十位の晝食して一時五十

「ヘルギ

分「リール」發の流車にて「ヘルギー、ブリキセール」迄行き四時四十分比「ベ
ルギー」着直ちに公園及び市中を馬車にて見物す七時半比「ホテル」着五
法夜食す流車中にて目新しき引船を見たり(我京都に於ける高瀬川の
引船の如し)船を馬又は電車に引かす此「ホテル」に使用^しせる窓掛^{まどかけ}は凡^{たゞ}
全^まくの「レース」織あり買求めたく思^{おも}へり

七月二日

午前九時「カフェ」後石田兒島の両君荷物延^{たん}着^{ちやく}の爲鳥居兒島の両君「ステ
ーション」へ荷物調^{しら}べに行けり其後「ブリキセール」博物館へ行く午後二
時二十分流車にて「アンタツプ」迄行く四時半比「アンタツプ」着直ちに「ホ
テル」に行き又領事館及び郵船會社へも行けり

七月三日

本日博物館へ行き後石川君を尋ね下宿屋にて面會す市中を一見して
「ホテル」に歸る午後十一時比「アンタツプ」發の流車にて「エキストラシャツ

「アンタ
ツプ」

ベル「迄行けり

七月四日

「エキス
ラシヤツ
ベル」

今朝四時半比「エキスラシヤツベル」着直ちに「ホテル」を叩き起し二時間
 斗り寝す豫て貰ひ受け置きたる稻畑君の添書持参にて染工場を見る
 次ぎに全地工業學校へ行きしが獨乙一般の風習として一切外人を警
 戒して參觀を許さず故に全校前任校長にして現今一己の資格にて考
 案を事とせらるゝ人を訪問し尙學校參觀の手續き等を尋ねしに外務
 省の許可を經るに非らざれば參觀を許さずと而して全省は許可を經
 んには少くも兩三日を費さざるを得ず全氏は親切にも校の内部に於
 ける談話並に自身の有益なる經驗談を話さる

六時發流車にて「コロン」へ行く七時着直ちに馬車にて市中を見物し此
 「ステーション」にて辻綿高橋兩君に出會す十一時三十分發の「ハンボロ
 ク」行流車にて出立す

「コロン

七月五日

「ハンボ
ロク」

本日午前八時「ハンボロク」着直ちに領事館へ行全所にて三井物産會社
 の竹村君に面會し全君の案内にて海岸の光景を見る此海岸の荷物は
 日本の十倍に優る大港なり後市中を見物して十二時四十分發の流車
 にて「ベルリン」へ行く午後四時半「ベルリン」着此時河内丸同乗の船友内
 藤石黒樫村の三君迎ひに來らる直ちに兩君の下宿へ行けり

七月六日

「ベルリ
ン」

本日伊藤君に面會し晝食後「ベルリン」公使館へ行き市中を見物しつゝ
 買物す

七月七日

「スル
リ」
王城

本日は内藤君の案内にて畫博覽會へ行く次ぎに王城を參觀す王城内
 天井は油繪彫刻織物の三つを以て恰も「パノラマ」的に裝飾を施せり其
 趣向の巧妙なる流石は王城の眞價あり

獨乙帝國博物館へ行く織物刺繡金物陶器の日本物澤山あり次ぎに當
「ヘルリン」第一の呉服屋へ見本裂を買ひに行く是亦内藤君の案内なり
晝食後又石黒君の案内にて再び前の呉服店へ行く市中にて買物す
余並に鳥居君は明日此地を出立するを以て告別の爲伊藤石黒内藤樫
村兒島石田の六君を招き會食せり

七月八日

本日伊藤内藤石黒樫村兒島石田六君に見送られ全君等と袂を別ち鳥
居君余と二人午前八時四十分發の瀛車にて「ドレスデン」へ行き全所へ
正午十二時着市中を見尙當地物産博覽會を見る巴里博覽會に於ける
が如く家屋の構造人物の風俗等を歴史的に排列せり「ドレスデン」及び
「コロンの」市中は其道路の清潔なる且凡ての事に完全せる家屋構造の
宏壯なる敢て巴里に劣らざ「ステーション」の如きは四町四面位あり午
後八時五十分の瀛車にて澳國「ビエンナー」へ行く

「ドレス
デン」

七月九日

朝八時半「ビエンナー」着直ちに「グランドホテル」に行く十時比より能勢
君を尋ねたり此下宿屋にて隈岡村今村君に面會し全所にて晝食す午
後三君の案内にて市中を見物し後能勢君の案内にて公使館へ行く一
等書記吉田作弥君に面會す後能勢君の案内にて買物に行く當夜「カフ
ペ」店に行き全地婦人の一般風俗を見たり

「ビエン
ナー」

七月十日

本日商業會議所へ行き又公使館へ行く吉田君に面會し「ヂウリーグ」領
事館への添書を依頼す後博物館へ行く全建築は世界第一なり次ぎに
能勢君の案内にて大學校を參觀す次ぎに呉服屋にて買物せり後公園
へ行く明治六年の万国博覽會場を見物す午後十一時「ホテル」に歸る

七月十一日

本日は恰も我京都の四條通の如き店屋を見物しつゝ能勢君の宿に行

く能勢隈両君の案内にて陶器屋及び端書屋へ行き何れも買物して隈君には別れ鳥居君余は明日此地を出立するにより告別の爲に能勢君を招き三人「ホテル」にて夜食す後能勢君の案内にて散歩しつゝ「カフェ」屋へ行く全所にて公使館の大幡石田両君に面會し色々世間話をなした後「ホテル」に歸る

「ビエンナー」人口百五十万

七月十二日

本日は呉服店を見又毛糸製造所へ行く午後牧野公使の避暑せらるる所を公使館にて尋ね直ちに全所へ面會に行き圖らず一氣車乗り越せり次ぎの列車の來るには二時間を空しく待たざる可らず故に斷然意を決し徒歩鐵道線路の傍なる小高き草原を辿り漸く元との「ステーション」迄歸り馬車にて直ちに公使の避暑せらるる許を訪問し面會を遂げたり其附近の山中風景は頗る佳なり歸路公使館へ行き吉田大幡

藤井三君に面會す此吉田君は京都新田の人なり又店屋を見て夜食後九時の瀛車にて「ヂュウリク」へ行く

此地にて買物せし店は陶器屋。敷物屋。皮細工屋。にして買物品は直ちに里昂へ送れり

七月十三日

瀛車中の
奇談

今朝は瀛車中よりの眺め山と川との景色甚宜しき所斗りにて晝食の時刻に及び車中の食堂へ入りしが食卓は既に過半塞ぎ居りしにより據なく余は鳥居君と遙かに別れて各食卓に就けり此時突然余の傍なる妙齡の而も閉月羞花沈魚落雁とも謂ふべき泰西婦人余に語るらく郎君は日本人と見受く妾も日本神戸八十一番に居住せる「マダムゼール、カロラン」と云ふものなりとていと親しげにはじかみながら話しを仕掛らる其状恰も朝露の未だひもあへぬ白薔薇か雨を帯びし海棠の如し余も此の万里異域の外國にて圖らずも本國に居住せる洋人に

奇遇し其上思ひもよら先より言ばを掛けられし不思議さにさしも
 の余も稍話しの緒を失ひしが互ひに語るに從ひ話しに實のり喃々談
 話を試み終に嬢と名刺を交換する迄に親しみ合へり遙か向ふの鳥居
 君は右の事情は知らせ只余と年若き令嬢の親しげに話し合ふ状をさ
 も不思議の面持ちにて屢此方を眺めらるゝ其顔と舉動にて心中察せ
 られ實に胞腹の至りに堪へざりし後具さに其事情を話し互に啞然た
 り之の嬢の一行は五人連れにて一人は香港に居る人とかや又嬢は覺
 束ながら鳥渡日本語も出来たり是より「スイートル」の湖邊を過ぐ奇巖
 怪石位置面白く點綴し其風致頗る宜し午後五時半比「スイートル」の
 「ヂウリツク」着直ちに「ヘルヒユルホテル」へ行く食堂にて又々意外の人
 に奇遇せりそは大槻西村吉田の三君なり

「スイー
 ツル」
 「ヂウ
 リツク」

七月十四日

本日は大槻西村吉田鳥居の四君と共に「ユウツエールフェル」と云ふ山

へ激車にて登る此山上よりの眺望は恰も我比叡山嶺より近江の湖面
 を瞰下するが如き山あり湖あり皆一望の裡に納む風景畫の如し午後
 七時「ヘルヒユルホテル」に歸る後寫眞繪畫を買求む

七月十五日

本日は大槻西村吉田三君は伊太利に向つて出立せらる出立に際し余
 に全行を勧めらる然れども余は「スイートル」の機業家を視察せんと欲
 する目的あるを以て辭去後全所博物館へ行き全館の本を求む此博物
 館は其建築法を専ら古への風を則れり出品の大要は(毛細工)(燒物)澤山
 あり又「ゴフラン」もあり尙土中より發掘せし古物も澤山あり全館を出
 て午後湖邊の「パツテラ」を備ひ遙か向ふの岸迄到らば何か有益なる視
 察の材料もあふんかとして暑さを忍び殆んど四時間程も費せしが何の
 得る所もなく實に徒勞に屬せり

「スイー
 ツル」
 博物館

七月十六日

今朝は當「チユウリック」名譽領事なる人の宅へ「ビエンナー」公使館吉田君の添書を以て面會に行く領事「シイペ、ワイフラン」君に面會を遂ぐ此人は日本に十八年居られ従つて日本語も少しは解せらる「ハンカチ」を手土産に持参し午後は稻畑君の添書を以て「ツイドマン」と云ふ染屋へ小蒸氣にて行けり此染屋は各國の糸を染め居れり染めに來れる糸凡二百捆余あるを認む此染屋の特長とする所は黒染百匁の糸を二百匁に膨脹せしめて染め上ぐと云ふ歸るに及び當主より全家の捺染分工場への添書並に大機業家への案内を受け直ちに「スイーツル、ゼンバー」と云ふ機業家へ行く此家は紋物、縮物、無地の服地を専門となせり「ペルド」式漉織機斗り機數八百八十外に出機千余もあり其使備せる職工は九百五十人ありと又三百人の食堂を見る其盛大なる實に目を驚かす斗りなり又備へ附けの器械を擧ぐれば經卷、フン取、箆、紋編み、糸粹、毛燒、カシヤ、紋ホリ、等の諸器械一として間然する所なし

「ツイドマン」
「スイーツル」
「ペルド」
機業家

七月十七日

織物學校

名譽領事の書面を以て織物學校へ行く生憎休日なりしも全校宿直の職員と覺ぼしき人に參觀を許され懇切に説明をせられたり此校を一見するに万事能く整頓せるが如く感せり且織機は凡て新式のみなり中にも「ペルド」式其他前後両上りの紋織器械機ツリ漉織機あり又一枚の紋紙にてニコソに用ふる紋織器機もあり又廿四の繰糸器械を始め其他附屬の器械皆完備す次ぎに参考室に至れば各國の織物は勿論日本本の織物も大低種類を蒐む殊に甚感せしは刺繡にして之れは刺繡の順序を一見知らしめんが爲半ばは刺繡を施し一半は未成の儘にてあり其注意の周到なること斯くの如し尙日本竹箆の如きに至る迄の陳列あり一驚を喫す次ぎに前日貰ひ受けし染屋「ツイドマン」君の添書を以て全君の捺染分工場へ行き大に参考の資を得たり次ぎに漉車に乗り巴里博覽會場内第一器械屋の添書を以て織物器械製造所を縦覽す

「ツイドマン」
捺染工場
織物器械製造所

今此製造所の宏大なる一班を述べんに先づ停車場より直ちに「レール」を引きて荷物を運搬し又人力の到底及ばざる大重量の荷物を二階三階の高さに自由に上下せる仕掛を備へたり又出来済の各種の器械を以て製織しつゝ一見して其應用を悟らしむ此工場に使役せる職工千二百人斗りなりと其宏壯驚くに堪へたり

七月十八日

午前十時發の瀛車にて伊太利「ミールン」へ向つて出立す車中の景は只山と湖のみ従つて數多の「トンネル」あり内長きは三十分間を要す又「スイツル」の端なる高山を瀛車の登るを窓中より遠見せり午後二時比より「スイツル」伊太利の國割となる此時税官は持參品を取調ふ是迄買ひ求めし品に對しての税金の不當に高價なるに驚けり殊に煙草に至つては假令「スイツル」にて買求めし四法の葉巻百本に對し七法の苛税を要すと以て其一班を知るべし依て折角求めし煙草は止むを

瀛車滑稽

得ず捨て置き他の品に對しての税金の應對に彼是する間に發車の時刻に逼れり依て見本品は兎も角「ミールン」迄送り呉るることに税官に依托し置き直ちに元の箱に歸りしに殘し置きし洋杖其他の品一物もなし故に狼狽し余は鳥居君と交々に搜索せしも其影だになし發車の時刻は彌々逼り今一步を過まれば乗り遅れの不幸に遭遇するを以て其儘に爲し置き漸くにして乗り込みり其間實に間一髪も管ならず乗り込むと全時に發車す後熟ら車中を見渡すに其体裁何となく元どの箱に違ふ点あり兎角する間に一驛に着す鳥居君は停車の間に尙箱毎に逐一搜索せられしに遙か向ふの機關車の次ぎの箱に品々皆揃ひてあり餘りの不思議さに聞糺せば全く我等の現在乗りし箱と元どの箱との位置の變せしに心附かざりしに因ることを始めて了解せり是等を所謂自然の滑稽と云ふならん此瀛車中にて嘗て日本に在住せられし羅馬人に出會す此人少しく日本語を解す依て車中にて話し合へり

「ミラー」

午後七時「ミラー」着直ち「ドラビールホテル」に行く
七月十九日

本日名譽領事の許に行く書記曰く領事は不在なりと且曰く伊太利一般は何工場に限らず縦覧を許さずと依て甚失望しながら再び午後領事を訪問せしが此度の曰くには領事は羅馬に行かれて不在なりとの甚無味冷贍なる言葉なり故に種々裏面を探ぐるに全く不在などは表面の口實にして此領事は傍ら機業を爲し居るを以て自己の工場縦覧の依頼に應じ難く引いて他の工場縦覧の紹介も爲し難きに因る午後五法の案内を雇ひ人民墓所火葬場並に市内公園凱旋門を見物して後「ホテル」に歸る

我國にては寺内に墓所を設けありしが此地にては寺と墓所とは全く離れ且墓所内に火葬場を併置せり
七月二十日

本日は前日「ミラー」停車場迄荷物を送り届け呉るゝ様税官に頼み置きしにより鳥居君停車場へ取りに行かれしも未だ着せず依て對路立寄る迄「ホテル」まで預り呉るゝ様に依頼をなし此地を出立することに決し案内者を連れ店屋を見に行き午後一時「ミラー」發の汽車にて發す車中は畑地に桑澤山あり湖も見ると七時「ベニス」着停車場前より渡し船にて「ヨフローフ」ホテルに着夜食後公園を散歩し直ちに歸る海の夜景を眺む

「ベニス」

「ベニス」は他に類を見ぬ一種の土地にて海中に一村をなせり故に人家は皆海上に建つ道路としては縦横皆大河小川にて交通は船を以てなせり其大通の河は我京都の加茂川程もあり
七月二十一日

今朝公園及び寺を見に行く此地は(硝子)細工の尤も盛なる土地柄なり此寺も大半硝子細工を以て成り立て且裝飾にもなせり一見甚美

硝子モ細工製造場

なり寺を出で、公園を逍遙せしに一の硝子モ細工屋の番頭と覺しき人余に向て我工場を縦覽せよとて案内す依て兎も角行きて見るに大なる「硝子モ細工」製造場なり其製造の狀を一々縦覽せしが一製造者の余の姓を問ふあり後直ちに我姓入の硝子細工一個を贈り呉れしが如き要するに土地一般商法上に巧みなるを知る余も少なき「モ細工」を買ひ又寫真を買ひ求め後「ホテル」に歸る晝食後又船にて他の寺を見直ちに「ステーション」へ行く午後二時四十分發の羅馬行の夜行に出立す車中八時比より十一時比迄は山と谷合のみ「トンチル」の數四十余内長さは三十分間を要せり谷に數多の螢の集るを見る

七月二十二日

羅馬

今朝七時羅馬着直ちに停車場前の「サントラール」ホテル「中央ホテル」へ行き後「カトリック」學校に行き羅馬法王に面會の手續きを依頼し置き後公使館へ行き日下部書記に面會し「ミラン」「コモ」への添書を依頼

羅馬宮殿

「カタコンブ」

し「ミラン」にて余の縦覽謝絶に遇ひしことを語る日下部君の曰く然らば「ミラン」への添書は全地名譽領事宛又「コモ」へは全所商業會議所會長宛の添書を認め置くとの承認を受く此公使館は余の是迄見し數多の公使館の内にて最も優れり其建築の壯麗なる且裝飾には充分の善美を盡せり後宮殿を縦覽す内部の裝飾には各種の織物及び「ゴブラン」を以てす殊に「ゴブラン」の如きは一間に大巾にて廿余もあり以て其結構を知るに足る次に伊太利第一寺（仮令は我京都にて本願寺に於けるが如し）を縦覽す油繪風石のモ細工を以て成れり午後「カタコンブ」を見物す「カタコンブ」とは（墓所又「洞穴」と云ふ意にして昔「カトリック」信者の遺体を納めし所にて其入口は面積凡一坪位の穴にて夫れより段々奥に入るに従ひ四方に廣がり深さは六丈斗りにして土壁に棚の如き穴を穿ち其内に棺を載せ或は石棺を其儘にして納めし所なりしが「カトリック」三世に至り宗教の大變革に際し此習慣を廢し今は只遺跡とし其儘に存しつゝありしと云

ふ

七月二十三日

博物館

本日は寺を二ヶ所見物す此寺も石のモ細工を以て成れり何れも壯麗にして内には未だ普請中の寺もあり（開闢一寺を建築するに凡廿ヶ年を要すと）次ぎに博物館二ヶ所縦覽す此國は世界中最も古き國故従つて古代の石像及びモ細工を陳列せり後公使館に行き日下部君に面會し前日依頼せし添書を受け全君と共に晝食す余は全君を招待する意なりしに却て全君の饗應となる寫眞廿七法及びモ細工を買求め馬車にて羅馬法王の殿を見物に行ぐ之れは法王に面會を遂げざりしを以て聊其失意を充さんが爲なり然るに又もや縦覽の時刻に遅れて本意を達せず加ふるに買ひ求めし寫眞を馬車中に置き忘依て歸りに又先の寫眞屋にて五十法寫眞を買ひ求む且全寫眞屋にて先に買ひ求めし寫眞は馬車に置き忘れしこと話し尙万二全馬車の許より此店へ送り届くることもあらば日本公

使館迄送り呉るゝ様依頼し置けり

七月二十四日

「ナープ」

本日午前八時廿分發「ナープ」に向て出立す車中近く山を見る恰も京阪間の流車中に於けるが如し二時四十分「ナープ」着直ちに濱邊の「ホテル」に行き案内者を雇ひ市中及び「カトリック」の寺を見物す此所は大通りの外は實に不潔にして日本の新平民村を通るが如し後公園及び水族館へ行く當地の物産は珊瑚珠龍甲等なり七時半比「ホテル」に歸る食事後三階より夜景を眺望す其景甚宜し此海邊は山もあり恰も日本神戸の諏訪山より市中及び海を眺むるが如し

七月二十五日

「ナープ」博物館

本日案内者を雇ひ「ナープ」博物館へ行く當館は「ポンペイ」の發掘物のみを陳列せり其物品には金銀銅の通貨及び全製の室内裝飾品（假令は假物）又は日用器或は壁の一部分に油繪の春畫を描きしもの數多あり寫眞

「ポンペイ」を買求む十時五十五分ナトプ發の瀛車にて「ポンペイ」に行く十二時着直ちに發掘せる状を見に行く其發掘せる地形は「L」の如く凡四町四方程の面積に見ゆ其發掘せし壁には春畫を描きてあり之れは定召女郎屋の遺蹟なりと想像す又普通業者の壁には土耳其風の模様畫あり主として宗教に因りし種々の畫を描あり又一ツノ假小屋には「ミイラ」とて人体の其儘化石なしたる者あり大人の男女或は小兒合せて七八人あり其他骨の片々は累々として山の如し又臥したる儘の骨もあり其隣れさ實に見るに忍又「パン」屋には必ず「陰莖」を看板となせり其法は家の入口の上なる石又は敷石に彫附く併し其何たる所以を知らず之の「ポンペイ」は「カトリック」の一世ヨリ七十七年比に大「ツナミ」に遇ひて一市街の理もれ後夫れを發見したるは「カトリック」の一世より千七百十四年ありと云ふ此所にて晝食し二時發の瀛車にて「ゼノワ」に向つて出立す瀛車中は山と「トンネル」斗なり「コームステーション」にて夜食す

七月二十六日

今朝瀛車中左は海右は山にて此山に「シャポテン」多く生せり「トンネル」の數四十余七時二十分比「ゼノワ」着「ステーション」前「サボワホテル」に行く名譽領事へ行きしが不在故博物館へ行き次ぎに寺を見に行く又歐羅巴第一の墓所を見に行く此墓所の廣さ凡十町四方余ありて實に見事なり後「ホテル」に歸りて晝食す後「ハガキ」を買求む此地は「マルセーユ」に次ぎての良港にして甚盛なり午后六時四十分發の瀛車にて「コモ」迄行き十一時三十分「コモ」着直ちに「ホテル」に行く

七月二十七日

本日は羅馬公使館日下部君の添書を以て當商業會議所會長に面會をなす會長よりは懇切にも自家の店員一名を案内者として附け呉られ機業家又は燃糸製糸場其他必用なる工場を滞りなく縦覽を遂げ大に参考の料を得たり四時卅分「コモ」を出立し六時ミラン着日下部君

の添書を以て兄弟織屋へ行きしが時刻遅れて果さず既に「コモロ」に於て十分の縦覧を得従つて此所は余り大差なしと考へ直ちに前の税官より送附する品の受取方を委託し置きたる「ホテル」に行き荷物の着否を尋ねしに未だ着せずと且全「ホテル」主人の曰く荷物を一旦此所にて受取り更に又送らば二度の税金を支拂はざる可らず故に此所にては荷上げを爲さず直ちに里昂へ送るが得策ならんと注意し呉れしにより更に其如く依頼して直ちに出立す

「コモロ」は其地勢恰も我日本の江州を小にせしが如き所にて湖山等あり此地を現今の如く商工業の盛に趣かしめしは現商業會議所會長の非常なる熱心に因れりと云ふ故に會長の此地に於ける勢力且人望は恰も人民の國主に對するが如し明治三十二年此地に電氣博覽會開設の舉ありしも全く會長の力にして全會長の斯くの如く企のありしも皆此地の繁榮及び商工業の發達を謀らん爲なり

七月廿八日

今朝瀧車中乗換への場所を過ぎて知らず識らず行過ぎ車長の注意によりて漸く心附しが全く過失より起りしこと故無賃にて元との乗換の驛まで戻し吳夫れより早速乗換正十二時「ゼチー」に着直ちに晝食し後市中を見物し「ハガキ」及び煙草を買ふ六時四十分發の瀧車にて出立し車中にて食事す九時比佛國税官煙草に對し七法の税金を取る十二時廿分里昂に着し直ちに下宿に行き呼び起せども起さず據なく「ミールンホテル」にて一宿す

七月廿九日 温度八十一度

木日は鳥居君腹痛に困しむ鹽の温罨法を施すに如かずとて元どの下宿屋に歸りて同法を行ふ午后十時比より少快に趣く余持參の藥を與へて介抱す爲めに余は晝食せず夕飯は竹田君と二人にて行く晩方雷雨あり

「ゼチー」

七月三十日 温度七十八度

益

本日は伊澤君の案内にて器械を買ひ求めに行く

七月卅一日

本日は鳥居君畧ぼ全快に付全道にて正金銀行へ行き次ぎに必用の器械を買求めに行けり

八月一日

本日本屋に行き三百法にて織物に必要な圖案并に織物参考用の畫本を買ふ

八月二日

本日は「ベリシヤリチー」と云ふ洋服店にて歸路船中用の「アルツバカ」の上着を買ふ

八月三日

本日は豫て飯田君の店より全君京都本店への送品の委託を依頼され

居余の荷物を發送する日に逼り居るを以て委託品の荷拵の出来し居るや否や又は其荷物の大さを見んが爲請求方々全店へ行く然るに丸紙包一個の荷拵出来し居りしにより全店竹田君より預り歸る次ぎに壁張紙屋へ行き支拂を濟し後鳥居君の用務を兼ねて靴屋へ立寄り後伊澤君下宿へ行き全君と歸路同行の打合せをなす

八月四日

「クルワ
コース」

糸試験場

本日九時伊澤君の下宿を訪ひ全君と「クルワコース」(我が西陣の如き地)へ行き二枚天鷲絨織賃機屋へ行く此家は手織屋なり後天鷲絨織に必用なる附屬品針金等を買ひに行く尙序に目硝子及び機道具屋へ行けり晝食後兒島君管君余と三人糸の試験場へ見に行く此誠験場は繭糸筋。目方。糸染。等其他織物に關して一切の試験を爲せり尙全試験場の参考室に蝶の百餘種もあり之れは其蝶の種類により其蝶より生じる糸の製出額並に糸の種類性質を明細に説明しあり後全所を出でて剪刀

八五

類を買求む夕飯後竹田君と散歩す鳥居君は本日領事書記官小西君へ
來客饗應の手傳に行かる

八月五日 温度午后十時七十一度

織物博物館

本日は早朝より菅君と同道織物博物館へ行き開館するを待つて直ち
に入る全館は其名の如く織物一切の博物館にして斯る博物館は未だ
世界になし今陳列の概況を述べんに昔より現今に至る自國の織物は
勿論世界各國の織物に至る迄皆此館に蒐集して一も漏すなく而かも
之の織物を歴史的に陳列して其發達進歩の趨勢を一目して了解せし
め尙現今にても博覽會等の出品にして珍らしき織物あらば直ちに買
ひ上げて蒐集することに務めつゝあり以上織物のみならず紋織器械
に至つても亦織物の陳列の如く古より今に至る器械の雛形を歴史的
に羅列して其進歩の狀況を知らしむ又珍らしき箴に至る迄又歴史的
に陳列せり箴の内にて殊に珍しきは立糸に玉或は寶石を通し織るに

其玉寶石を糸と共に越す箴あり其他織物附屬器具一として備はらざ
るなし要するに全館を熟覽すれば織物及び器械に對し昔より今に至
る進歩の狀体及び沿革等整然として裨益を得ること筆紙に盡し難し
余も正午迄全館に居り後出でて晝食し伊澤君の下宿へ尙歸路の打合
せに行く

八月六日

本日は既に余歸國に近くにより紀念の爲竹田長瀬管鳥居君を招き余
と五名寫眞屋へ行き撮影す其後又「クルワロース」へ行き縫取器械の注
文をなし全主人に心附けをなして全地縫取織屋二三ヶ所を案内せし
め縫取織の實況を視察す後圖案家へ行き必用なる事項を研究し併せ
て古き圖案百八十五法買求めて歸る

八月七日

「サンテツ」本日は七時二十分の瀛車にて里昂の北に當る片田舎の「サンテツエン」へ

行く〔此地は恰も西陣に對する丹後縮緬製織地に於けるが如し〕第一鳥居君の知己先ある「リボン」の織屋へ行
 く「リボン」とは巾狭き織物にして多く婦人の帽子の裝飾又は服の袖口
 等の裝飾に用ゐる織物なり全家手代一人案内者として附けらる案内に
 先だち豫て伊澤君より貰ひ受し添書を以て「リボン」織屋を縦覽す全家
 にては十二筋の「リボン」を全時に織る機もあり又就て問ふに織工手間
 は一法より三法位にして一日に「五メートル」を織れりと全家を出でて
 案内者に附きて行きしに織屋へは連れ行かば只其下職なる糸に糊を
 施す家又は糸熱屋等斗りにして空しく正午となれり故に兎も角案内
 者を連れ共に晝食し後鳥居君知己なる織屋の主人來りて我本宅へ來
 れど勸む且午後は自ら案内の勞を取らんと云ふ勸めに従ひ行き「カフ
 ペ」の馳走を受け出でて主人の案内に従ひ行くに午前と變らず余の望
 む家へは案内をなきず只時間を徒費せしむる斗なり兎角する間に午
 后三時となる余熟ら考ふるに全主人は余等をして機業家を縦覽せし

むることを厭ふ風に見受く故に全主人にば之れより里昂へ行くこと
 を告げ一先別れ更に案内者の手を借らずして直接に縦覽を乞はんと
 欲し引返して二三の賃機屋へ行しに承諾を得漸く本意を遂げたり内
 一ヶ所は曲五分位の二枚の「ビロード」を製織し居れり二枚「ビロード」と
 は針金を用ひず二枚を合せて織り上げし後切斷して二枚となすもの
 午後六時四十分流車にて里昂へ歸る夜食後竹田君の下宿へ行く巴里
 に居らるゝ長尾君は余の十二日に出立するに付種々の話もあり又余
 を見送らん意にて全君より十一時着の流車にて此地に來ると云ふ電
 報に接す鳥居君は停車場迄迎ひに行く長尾君來全宿す此日夕方より
 雷雨あり

八月八日 温度七十度

本日は領事館へ行き小西君に面會し別れを告げ且後に残る傳習生の
 ことに關して懇々依頼し置き後長尾君と余と二人伊澤君の宅に行き

しが不在なりしにより兩人店屋を見つゝ下宿に歸る夜食後竹田君宿にて長沼泰兩君及び羽倉君と長尾君余とを合せ五名打寄り種々の長話をなし後歸る本日鳥居長瀬の兩君は林君の宅へ行かれたり
八月九日

織物組合

本日は伊澤君と天鷲絨の機を見に行き全君の周旋にて此機を三百三十法にて参考の爲買求む後織物組合へ行き彼我の組織に研究の爲尋ぬ然るに此組合の組織は西陣同業組合の如く機業全体の組合には非らずして機業の内其種類により一組合を鞏固に組織せり故に機業の種類に應じ其組合も數多あり次ぎに機古道具屋を索見し又剪刀屋へも行く本夜晚餐後竹田君と寄せに行く本日は日本銀行へ金の取附けに行きたり

八月十日

本日は余明日出立するにより荷物の片附をなし晝食後寫眞屋へ行き

前に寫せし寫眞を取りに行き尙土産物を買調へんが爲勸商場へ行き後歸宿す本夕食は余等出立の送別として竹田鳥居長瀬の三君日本食にて伊澤長尾管君及び余を饗應せらる其後伊澤君と明十一日出立の時間を約して別れたる

八月十一日

本日は鳥居長尾兩君に弥々日本へ歸る上につきての種々の話をなし其他勘定を濟し管君には留學の資に又長尾君には態々巴里より見送りに来るを呉られし好意に報ひんが爲之の兩君に對し聊か贈金せんと欲する意ありしが万一歸りの旅費に缺乏せんことを慮り兩君に其由を話し歸國後送金すること爲せり又鳥居君は余を「マルセーユ」迄迎ひに来られし費用並に余と同行中の缺損を合せ金百圓を請求せらる是亦前全様歸國后同君宅へ返戻することに爲せり

午後十一時五十分流車にて「マルセーユ」迄出立伊澤君と余と同行二人

なり此時竹田島居長尾管長瀬の五君見送らる萬里を隔つる外國にて
たとひ是迄面識なき我國人に逢ひてすら何となく心慥かにして別る
こととの心細く感ずるは人情の常なるに況して今迄互に力になり合
ひし親しき友を余等は後に残して行く身又彼等は後に残さるゝ身其
身に互ひの違ひはわれども別れの悲しさは皆一つ互に口にこそ出さ
され只一點の紅涙にて心の底は知られけり

八月十二日

今朝七時比に馮耳鑿着直さに「カフェ」を濟し市内の光景を見るに戸毎
に國旗を列ね何かの祝祭日の如き狀なり故に「カフェ」屋に就きて問ふ
に本日は數多の士官の支那事件の爲或は佛國領地「サイゴン」へ出發せ
らるゝを大統領之が見送りを爲さんため此市中へ來らるゝにより斯
く市中の騒ぎ居る次第なりと此店を出で後「メサジリ」會社へ行き船
賃の殘金六百五十法を仕拂ひ佛船の切符を受け取り次ぎに荷物會社

船員の「ストライキ」

へ行き里昂より送り出せし荷物の着否を確かめ三十法の運賃を仕拂
ふ大荷物は前述の如く既に會社に托し發送せしが他の小荷物は仲仕
様の者を雇ひて船中へ運搬し置かしむ其賃錢凡廿法なり次ぎに船中
の必需品寢椅子を買求む伊澤君は先に「ゼネーホテル」に印度帽を預
け置きしにより晝食旁々全「ホテル」へ帽子を取りに行くに付余に全行
を勧めらる余も賛成し幸ひに全君の帽子もあり食事を濟し後兎も角
此度乗り込む「トリチーシャ」と云ふ船中の有様及び全船に我が荷物の
着否を確かめんが爲直ちに「トリチーシャ」号に乗り込みしに全船の近傍
に碇泊せる船に凡一百人斗りの船員「ストライキ」を起せるに遇ふ此狀
恰も一小戰鬪の如く「ストライキ」を爲せる者は船中に残り居る不同意
者を連れ出さんとして船中に乱入す船は之等を防がんが爲船と棧橋と
の間に架せる橋を引き上げ他の附近の關係なき船までも一時皆船橋
を引き上げたり余の乗り込みし船も亦全しく船橋を撤せり依て余等

ニトリ子
に表込
馬耳塞解

は歸路を失ひ船員に就き如何に促せども肯んせず據なく爲に三時間
斗りを船中に徒費せり之等の暴舉を制止する憲兵或は巡查は皆大統
領護衛の爲其方へ行き居り制止する運びに行かざりしにより斯く長
時間の迷惑を來せしなり漸くにして數多の憲兵巡查の來りて鎮撫せ
り此の騒ぎの爲余の小荷物も未だ着せぬ故に仲仕に就き調べしが是
亦前刻の騒ぎにて他の數多の荷物と混乱せり依て余の荷物を調べ出
し更に仲仕に托して船中に運び入らしむ之れにて用事も果て且出帆
の時刻にも余程間のあること故に一先船を出でて市中を散歩し八時
比歸船し夕食す九時比に至り船は全く馬耳塞を出帆す
之の日の大統領は曩に余の六月十日巴里に於て大競馬を觀覽せし時
にも全夫人並に數名の隨行者と共に臨場ありたり總て斯る場合には
人民は道路の兩側に整列し満心敬意を表し歡呼の聲暫し止まず又大
統領の之れに對する動勢は極めて鄭重にして右顧左眄以て一々答禮

公德

の意を表せらるる其官民間の親しくして而も其間一髮の隔なき所謂上
下一致の美風を窺ふに足る加之人民一般公德の進みつゝあるには余
の實に羨望すると全時に汗心せし場合屢々あり今其一を擧げんに街
路に於て葬式に出會ひし時は死者に何の緣故を保たざる者にても貴
賤貧富考幼男女の別なく皆棺に向つて必ず脱帽敬禮す之れ等のこと
は何等の制裁もあきことながら謂はずして自然に茲に至る之れ全く
社會公德の然らしむるに因る尙斯の如き類例の一々枚擧し難し余は
今回歐洲を巡歴せしに當り一般社會公德の著しき進歩を見彼我を比
較し心竊かに悚然たり余は歸朝すると全時に今回の渡歐者と團結し
一の規約を結び葬式に出會ひし際は元よ其其他總て將來互に公德に
留意實行せんことを約し聊か社會の趨勢の漸次茲に傾かんことを希
へり同感の士宜しく意を公德に注ぎ以て彼れ外人の來遊者に對し愧
づる所なからしめよ

八月十三日

本日は十一時より三時間斗り右手に「コルシカ」島を眺む十二時迄船の進行百九十八「マイル」一時比より白波起り船爲めに動揺すること十一時比迄なり

八月十四日

本日は九時甲板に上る伊太利の鳥々を多く眺む今朝は伊澤君前日船の動揺せし爲少しく船暈の氣味にて食堂に來られず「シヨコラ」と「パン」を室内に持ち來る十時比より伊太利大陸と島との海峡を通過す十二時迄の進行三百五十三「マイル」大陸の近海故多くの帆前船の來往せるを見る

○佛國船内食事の狀況

朝食

七時より八時まで

一、パン 二、（佛語）カフェ

三、（紅茶）デユテ

四、シヨコラ

五、（佛語）キユレイ

晝食 十時

我國の口取ノ如キモノ 一、（佛語）類又類

二、肉皿 三、肴皿

四、羊 五、冷肉 六、「カレライス」 七、果物

八、菓子 九、（佛語）デユテ

十、（佛語）コンニヤク

夜食 六時 一、スープ 二、冷肉 三、肴 四、羊 五、（佛語）付ノ肉

六、「カレライス」 七、果物 八、「アイスグリーン」

九、（佛語）デユテ 十、「コンニヤク」

之の外尙間炊として午後四時比左の品を出す又葡萄酒は飲次第なり
「スープ」冷肉。葡萄酒。

右は日により多少の異動はあれども大畧品數及び順序は斯くの如し

八月十五日

本日は四面只水雲のみ船中入浴す（湯ノことを）十二時迄の進行三百四十九「マイル」なり

八月十六日

本日も四面水雲の外目を遮るものなし十二時迄の進行三百六十二「マイル」本日より「レモン」と云ふ飲料を供せり之れは恰も柚又は青蜜柑の如き果物にして之の果物の汁を取り水を入れて飲む其味蜜柑水の水如し之れは暑氣に向ひて始めて供するものなり

八月十七日 晴

坡西土

今朝四時比(坡西土)着五時半比より伊澤君と兩人上陸し一法二十「サンチーム」にて「カフベ」を食し散歩す巻煙草三法「マツチ」十二五十「サンチーム」葉團扇三十「サンチーム」寫真二法を買求む「ハンケ」を往買一法四十「サンチーム」歸七十「サンチーム」九時歸船す午前十時出帆是より「スエス」の運河に入る(スエス)運河の景況は五月十四日の記事に説明せり六時比運河の中程なる湖にて坐船す蒸氣船來て之れを引き種々試むれども本夜は動かす全く引汐の爲ならん

船座

八月十八日 晴

今朝も未だ船動かす十時比より汐の都合にて動き出し又々一時比より坐船す漸く四時比に至り動き午後十時比「スエス」着十二時比出帆す
八月十九日 晴

本日より紅海に入る「スエス」を出すれば紅海なり九時比に一の汽船に行き違ふ十二時迄の進行百七十九「マイル」伊澤君病氣にて船醫の診察を受く併し當分のことなり

八月二十日 晴 温度(午后)八十九度

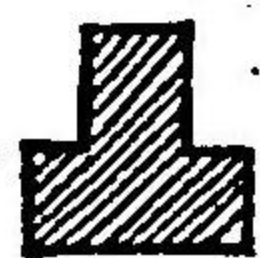
入水者の救助

本日十時比過つて入水せし者あり就きて問ふに船夫印度人とのことなり今救助の順序を述べんに入水者あらば第一に○を投げて入水者に捕へしめ置き以て沈没を防ぎ次ぎに入水の場所を失はんことを慮り火燈を入れる之れは入水者あると同時に船の進行は止むれども隋力の爲に二「マイル」程は進行すればなり船の進行全く止まらば直ちに救助船の準備を爲して本船を火燈を隔る半「マイル」程迄近づけて此所に

て救助船を浮べ怒濤逆浪を冒し漸くにして救び上ぐ之の二「マイル」間を救助船にて進まば進行遅くして之の急の場合に合はず且波の爲にぎ付くるに甚困難あるを以てなり○を投げ與へ火燈を入れるの二つは實に瞬間なれども全く入水者を救ひ上ぐるには凡二時間を費す救ひ上ぐれば次ぎに火燈を上げ最後に救助船を本船に仕舞ふ入水者あらむ斯くの如き順序を以て實に敏捷と熟練との働きを以て救助するなり本日の入水者は後に聞けば全く飲酒の上涼を納れんが爲船先にて寝過つて入水せしものことなり

前記火燈は晝は煙夜は火光に見ゆる様の仕掛なり
 (附言)「フランスメール」には乗客毎に必ず一個づつ浮き(左圖の如し)を室内に供れども日本船には未だ其備へなし

(浮キノ畧圖)



(圖解)

「キルク」製ノ様ニ思ハルニ一枚アリ
 萬一ノ場合ニハ腹部ト背部ニ一枚ツ、ヲ紐ニテ着クルナリ

本日十二時迄の進行三百三十四「マイル」なり

八月二十一日 温度午前共九十度

紅海中にて之の一兩日間殊に暑し十二時迄進行三百五十五「マイル」午後四時比左手に二本「マツタ」帆「マツタ」トハの漁船を見る余の乗船「トリネー

ジャ」は二艘を乗越す凡て外國船は其進行甚速し二十分間位雨あり

「トリネー」一時間速力 十四「ノット」余

日本船 全 十二「ノット」余

八月二十二日 晴温度午後四時八十一度

今朝島を多く見る三時比迄漁船にも出合ふ之の海中色烏并に鱈澤山を認む十二時迄の進行三百六十一「マイル」紅海を乗り越し亞丁海に入る船の方向は東少しく南に進む夕飯比より伊澤君又少しく頭痛にて服藥せらる

八月二十三日 晴温度午後四時八十七度

大 旋

本日は水雲のみにして「アフリカ」と「アラビヤ」を遠く隔り茫々たる一大洋なる故九時比より船動揺し始め二時間斗り止むことなし海面は怒濤澎湃たり船は騰りては九天を衝き落しては奈落の底も穿つべく其状荒涼じなんと云ふ斗りなし乗客は皆晝食を卓子に着きて爲すもの少し十二時迄進行東に向て三百四十六「マイル」六時比よりは船大動揺し余も食を半ばにして室に入る尤も卓子に出る人少し伊澤君は終日室を出でず且朝より一も飲食せられざるを以て余は何か食物を室に持ち來らんことを勸むれども全君は到底飲食を爲す能はずとて斷はる斯くの如く船の動揺烈しき時は卓子に紐と并に紐に通せる板とを以て枰を設けて器物の轉倒を防げり

八月二十四日 晴温度^{午后三時}七十九度

本日も引續き大動揺止まず船中の不愉快之れに過ぎず余は晝食を半ばす伊澤君は室を出でず十二時迄進行三百三十「マイル」

八月二十五日 晴温度五時八十一度

本日も尙動揺止まず併し昨日の如く烈しかつず十二時迄の進行三百五十二「マイル」本日は兩人共食事を爲す

八月二十六日 晴温度三時八十二度

本日も水雲斗り動揺は殆んど普通に復す十二時迄の進行三百五十六「マイル」

八月二十七日 晴温度^{午后四時}八十二度

本日も水雲のみ海上靜穩に復す十二時迄の進行三百六十七「マイル」午後四時比に左手の向ふ幽かに汽船見ゆ行違ふ

八月二十八日

本日も水雲斗り十時比右手の汽船を乗越す十二時迄の進行三百五十七「マイル」「コロンボ」迄残り五十「マイル」午後三時「コロンボ」着五時比「インシュス」號に乗換ゆ之れは「インシュス」は「トリナイシャ」より一週間先に

「インシュス」號
に乗換

「マルセーユ」を援^{ボウキ}し印^{イン}度の西北なる「ボンベ」に寄^キ港^{コウ}し「ユロンボ」に歸^キる其間一週^{ツウ}日^{ニチ}費^ヒす恰^{アタ}も「トリチーシヤ」の「ユロンボ」に着^キすると同時に出^デ會^{カイ}ふ而^{シテ}して「トリチーシヤ」は此所より分^ワれて南方^{ナン}「オーストリア」に向^ムつて行^イき「インシユス」は此所より日本^{ニッポン}へ行^イく故^ユに全船^{ゼンセン}に乘^ノり換^カゆるなり若^カし最^{サイ}初^{ショ}「マルセーユ」より「インシユス」に乘^ノり込^コまば乘^ノり換^カを要^{ヨウ}せざるも船^{セン}中空^{クウ}しく一週^{ツウ}間^{カン}を徒^タ費^ヒせざるべからず故^ユに大^{ダイ}低^{テイ}は斯^カくの如^カくして乘^ノり換^カゆるなり

乘^ノり換^カゆるには「インシユス」より小^コ蒸^{ジュウ}氣^キを以^モて迎^{ムカ}ひに來^キる夫^トれにて全船^{ゼンセン}に乘^ノり移^{ウツ}るなり之^ノの小^コ蒸^{ジュウ}氣^キに乘^ノり込^コみし時^{トキ}圖^ズらず大^{ダイ}島^{シマ}中^{チュウ}佐^サと同^{ドウ}乘^ノり始^{ハジ}めて互^ニに名^ナ乘^ノり合^アへり余^ハは「マルセーユ」を發^{ハツ}する時^{トキ}余^ハ等^トの外^ノに一人^ニの日本^{ニッポン}人^{ジン}乗^ノ客^{カク}あることを聞^キき船^{セン}中^{チュウ}に於^キて出^デ會^{カイ}ふ機^キ會^{カイ}なく又^{マタ}大^{ダイ}島^{シマ}君^{キミ}は西洋^{セウヤウ}人^{ジン}とのみ思^{オモ}ひ居^イりしに此^ノ時^{トキ}始^{ハジ}めて先^マの日本^{ニッポン}人^{ジン}乗^ノ客^{カク}は全^{ゼン}く大^{ダイ}島^{シマ}君^{キミ}にてありしなり七^{シチ}時^ジ比^ヒに廿^ニ分^{フン}間^{カン}斗^トり雨^{アメ}降^フる荷^カ物^{モノ}は皆^{ゼン}「トリチーシヤ」の「ガ

ル^ルン^ン」長^{チカ}より「インシユス」の「ガ^ガル^ルン^ン」長^{チカ}へ引^ヒ渡^ワし其^ノ荷^カ物^{モノ}には室^ムの番^{バン}號^{ゴウ}と同^{ドウ}番^{バン}號^{ゴウ}の札^{セツ}を悉^{シツ}く附^ツけ置^キき室^ムに運^ハび入^レれ呉^クるゝなり故^ユに乗^ノ客^{カク}は我^ガ身^ミ丈^ヂけ豫^ヨて案^{アン}内^{ナイ}を受^ウけ居^イる番^{バン}號^{ゴウ}の室^ムに入^レる余^ハの荷^カ物^{モノ}は十^{ジュウ}時^ジ比^ヒ着^シす一^{イチ}應^{オウ}調^{テウ}べ后^コ寢^ネす

八月廿九日 晴

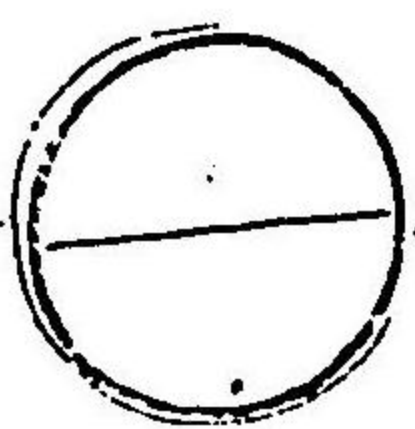
今朝^{コンアサ}「インシユス」四^シ時^ジ比^ヒ「ユロンボ」出^デ帆^{パン}十二^{ジュウニ}時^ジ迄^チの進^{シン}行^{コウ}を附^ツけ落^ラず一時^{イチ}比^ヒ迄^チ左手^{サマダ}に山^{ヤマ}を望^{ノゾ}む右^ミ手^テに汽^キ船^{セン}一^{イチ}艘^{ボウ}に行^イき越^コせり

八月三十日 晴

今朝^{コンアサ}暫^{シブ}時^ジ雨^{アメ}あり十二^{ジュウニ}時^ジ迄^チの進^{シン}行^{コウ}三百^{サン}八^{ハチ}十^{ジュウ}「マイル」午^ヌ后^コ四^シ時^ジ迄^チ汽^キ船^{セン}一^{イチ}艘^{ボウ}を追^オひ越^コす我^ガ等^トの乘^ノ船^{セン}中^{チュウ}左^サの游^{ユウ}戲^キ器^キ械^ケの備^ビへ附^ツあり之^レは身^ミ體^{タイ}の運^{ウン}動^{ドウ}にもなりて甚^シ宜^イし

B	100	B
80	10	90
30	20	40
60	50	70

(板^{イタ} 護^ゴ 護^ゴ)



厚^{コト}五^イ分^{ブン}

徑^{ヘリ}凡^ニ三^{サン}寸^{スン}五^ゴ分^{ブン}

(方法)各^ノ十二^{ジュウニ}片^ペノ護^ゴ護^ゴ枚^マヲ持^テチ梓^{ソウ}ノ中^{チュウ}へ投^ナゲ入^レテ數^スヲ取^リル若^シシ護^ゴ護^ゴ板^{イタ}(B)ノ梓^{ソウ}中^{チュウ}ニ入^レレバ是^レ迄^チ取^リシ數^スハ零^{ゼロ}トナル

八月卅一日

本日は水雲斗り十二時迄の進行三百四十二「マイル」午後八時比より右手に多くの島を見る

九月一日 晴

本日島を見る十二時迄の進行三百三十九「マイル」新嘉坡迄残り四百二十「マイル」一時比よりは水雲のみ

九月二日

本日は島を多く見左手に佛の軍艦一艘を乗越す又汽船に行違ふ十二時迄の進行三百四十五「マイル」新嘉坡迄七十五「マイル」午後七時新嘉坡着直ちに上陸し日新館及び廿五番を訪ひ本夜は陸宿し日本食をなす

九月三日

今朝日新館にて日本食をなす九時「インシュス」へ歸船す午前十一時出帆す新嘉坡を後に見て五時比に島を遙に眺む又幽かに汽船二艘をも

見る

九月四日

今朝は水雲斗り丑の方に向て進行す十二時迄三百三十九「マイル」西貢迄の残り三百「マイル」四時比汽船に行違ふ暫く雨あり夕方虹を見る八時比遙かに燈臺を見る此燈臺は七十「マイル」程手前より見る

九月五日

西貢
今朝八時西貢の運河入口に達す之の運河は殆んど「スエス」運河に於けるが如く幅は漸く船二艘の行き違ひを得る斗りにして長さは凡五十「マイル」あり之の運河を通り午後二時全く西貢に着す此所にて二等西洋人及び佛國兵三百人斗り上陸す残る者は「カトリック」十一人香港行の伊太利人及び我等二人なり又此所よりの乗込人は西洋婦人一人と支那人三人なり夕食後市中を遊覽せしに此土地には日本人及び日本商店を見受けざりしが只一の日本雜貨店あるに行き會へり入りて店

主に就き種々談話を試みしに此人は長崎の高橋と云ふ人にして此人深切にも我等に一泊せんことを勧めらる依て其厚意を受け全家に一泊することに爲す全家細君は我等を案内して其附近の市中景況を巡覽せしめられたり

九月六日

本日午前は高橋細君の案内にて支那人吳服店其他店屋を見に行けり之の細君は西貢語は勿論其他佛英支那の語に稍通じ居らるゝにより甚便利にてありし午後は高橋君の案内にて瀛車に乗り支那王宮の遺跡を觀覽す之の西貢は今は佛領なれども元は支那領なりしにより今に支那の遺跡を其儘に保存せり歸路大雨に會ふ此地半年は殆んど雨斗り併し日本の海雨の如き降り方には非ずして強雨一時に來りては又止み間あり我等雨宿りを兼ね店屋を索見しつゝ高橋店へ歸る夕食後公園及び市中を見て歸店す市中道路にて我等甚不潔を感せしこと

ありそは支那婦人の風習として喫煙の代りに檳榔子を噛む依て口邊は皆赤く染りて異様の姿なり加之道路の何處を問はず唾を吐くを以て到る處赤き唾痕の点々として其不潔極りなし明日は既に此地を出帆するを以て本夜は全家を辭し歸船することになし今迄の厚意を謝し且其印として廿法の禮金を贈り兩人「インシュス」に歸る此地は進帶國なる故其物産も象牙。虎。豹。蛇の皮及び繭等なり

九月七日 曇

今朝七時出帆此時高橋君見送られ且土産として煎餅鐵入二個并に團扇二本を贈らる正午十二時運河を通り抜け夫れより北東方に向て進行す左手に澤山の島を見る

九月八日 晴

本日十時比迄大陸及び島を見る十二時迄の進行丑の方に向て三百五十五「マイル」香港迄残り五百六十五「マイル」此時汽船一艘行違ふ本日は

先に托せし手荷物の有無を確かめんが爲一應取調ふ

九月九日 曇

本日は水雲のみ丑の方に向ひ進行す十二時迄三百廿二「マイル」香港迄残り二百四十三「マイル」一時比より船大動揺す聞く所によれば臺灣近海の大荒の餘響なりと爲めに夕食に出ずる人少なし夜中又揺り返す

九月十日 雨

今朝七時香港着到着迄動揺し通せり香港入口にて一の溺死者の伏向けにて浮ぶものありし全く前夜の荒れにて溺死せしものならん我等乗船の今や碇を卸さんとするに當り波の爲め隣りの碇泊船に衝突せんとせしが漸くたして免る併し衝突は兎れしが茲に意外の椿事の起れりとは隣りの碇泊船の水夫が小船にて本船の何か直し物を爲し居りしが我等乗船の船底が碇泊船の碇綱の水中に隠れ居りしものに摩れ其響きにて前小船立ちに轉覆し四人の水夫は船と共に水中に投ず

故に我等の乗船よりは直ちに○を投げ又印の火燈を卸して多くの人の入水者を救助せるを認めつゝ其所を進行せり晝食後十一時上陸せしが雨の爲見物も爲し難く依て取敢へず正金銀行へ行き新聞などを見又余の所持の佛貨を我國貨幣に換へんと欲し其相場を聞きしに百法につき三拾七圓六拾錢なりと云ふ余りの損故打換は止む午後五時解纜の所大風雨の爲到底出帆する能はず船は皆梯子を納め碇を卸し風のまに〜任せつゝ止むを得ず碇泊せり夜中に至り勢烈しく吹返す

九月十一日 風

本日も前日と全しく大暴風爲めに船は碇泊す十二時辰巳の風又丑寅の風吹出す四時比少しく穩になりしにより船は沖際迄進行せしも失張風烈しく到底進行する能はず故に其所にて碇泊せり

九月十二日

午前曇
午後霽

今朝五時漸く出帆す然れども大荒の後故船は動搖甚し余は昨日より下痢を催し十時比船醫の診察を受け服藥す十二時迄進行九十「マイル」上海迄残り七百十六「マイル」二時比汽船一艘に行違ふ全時「ヤンク」を見る本日は左手に陸及び島を多く望む

九月十三日 晴

本日又もや船大動搖す大陸及び島を多く見る汽船後より來る十二時迄の進行三百四十六「マイル」上海迄残り三百七十「マイル」本日は下痢全く止む前日服藥の効か午後より大風雨となる

九月十四日 風雨

本日も前日より引續ぎ風雨止まぜ爲め船は大動搖殊に烈しく一統大に困難す十二時迄進行二百八十四「マイル」残り八十六「マイル」船の動搖甚しき時は浪の高さ船より上にあり三時半比上海入口にて碇泊す之れは其船体大にして其上風雨烈しく操縦自由ならず止むを得ざり

待す十一時半比に至り漸く進行を始め上海に向つて進む

九月十五日 風雨

今朝五時上海運河入口迄着船体大なるが故に運河を通過する能はず依て運河入口にて大島中佐伊澤君余と三人「メサソリ」會社小蒸氣に乗り換へて運河を通り上海へ行く途すがら蒙古古式の儘の船澤山置据

たるを見る着後直ちに上陸し余は大島伊澤の兩君にはぐれ其附近を再三披索の上瀬く會することを得たり之れは兩君は上陸後直ちに「メサソリ」會社に入り汽船出帆の時間を問合せ居られし間に余は知らずして行過ぎ之に至りしなり直ちに東和洋行の宿に着き伊澤余兩名此所にて弥來る十九日神戸着の電報を發せり後吳服店及び支那町を見て九時比又小蒸氣に乗り本船に歸る此宿は曩に金玉均の斬殺せられし所なり

九月十六日 曇

本日午前三時出帆す東北に向ひ進行十二時迄百廿八「マイル」長崎迄残り二百十五「マイル」本日午後少しく動揺す

九月十七日 曇

長崎

本日十二時長崎入口迄着檢疫濟の上午後二時長崎港に着す然るに水上警察署々長は小蒸瀛にて大島中佐を迎ひに來られ其節署長は余に住所姓名並に何處より歸りしかなどを問はる依て其間に答ふるに歐州視察の旨を以てす署長は好意上余上陸するならば大島君と共に之の小蒸瀛にて上陸なさば如何との勸めに従ひ伊澤君と共に之の小蒸瀛にて上陸し此所にて署長並に大島君には別れ余等二人は取敢へず宿を求めざるべからずと思ひしも長崎は始めてのこと故何れが宜しきか不案内に付派出所に就きて問合し福島屋との案内を得て全店へ行きしに圖らず前に一先別れし大島君の偶然此所に宿泊せられしに再會せり余等は此旅店に宿を定むると全時に兎も角久々にて散髪せ

んと欲し呼ひ寄せて散髪をなし次ぎに此旅店の主人挨拶に來り余の何所より來り何所に歸るかなどを問ふ依て歐州視察の上京都に歸る旨を答ふ然るに主人は當店へ京都の人二人連れにて宿泊せられ先刻既に二人共發足せられしことを告ぐ余は京都と云ふことに聞流す能はず其二人の姓名を問ひしに主人は覺ぬすと依て宿泊帳を調べしに意外にも小西鳥居と記載しあり而も余の見覺へある自書なるを以て之に至り全く兩君は余の歸りを遙々此長崎迄迎ひに來られしことを略ぼ知り夫れと全時に人を出し目當てとてけなきながらも兩君の後を追ひ尋ねしむ然るに兩君は五時過ぎ之の宿へ再び歸られ漸くにして會することを得たり其間余は非常に心を苦しむ兩君の曰はく余等は十一日京都を發足し夫れより九州地方を見物しつゝ十三日に此旅宿に宿を定め未だ余の乗船の着せざるを以て肥前博多邊を見物しつゝ又此宿に歸り今日「インシユス」の此港に着せしことを聞き直ちに船

へ迎ひに行きしに一向見受けざるを以て船員に就き問ひしに船員曰はく伊達君は先刻上陸せられし由にて則ち全君の室は此所なりとて案内をなせり依て余等二人も伊達君に面會の上は此船に全乗して神戸迄歸る旨を告ぐるも語通せ老或は互に手まねなどにて漸く語り合ひ其間非常の困難を感ず船員の曰く果して此船に同乗するならば明日八時の出帆故夫れより一時間前に來ることを手まねにて告ぐ且水上警察の小蒸氣にて上陸せられしこと丈けを耳にせしを以て引返し差詰め警察署に至り尋ねしに署長は如何にも伊達君は余と共に上陸せしも其後何れに宿を取られしか知ら老と依て此上は宿毎に尋ぬる外致し方おくと思ひ大決心の上兎に角元との旅宿に歸り始めて會することを得たり此間の困難は實に言ふべからずとの話なり余は斯く遠方迄態々迎ひに來らるゝことゝは露知ら老余りの意想外にて歡極りて言葉なし只心に兩君の厚意を感謝せり余渡歐以來久々之の懐か

しき兩君に面接し何れより語りて宜きか話柄を求むるに困り先づ一別以來を且語り且答へ盡くる所を知らず時恰も夕景になりしにより兎も角晚餐を共にし後一統市中の夜景を見物し此所の遊廓に至り或る青樓に登りて觀を盡す小西善鳥居榮兩君は豫て余等の乗船中に一泊し船中の狀を觀覽せんことを望み居らるゝにより伊澤君は船中の準備方々一步先きに又大島君を誘ひ共に歸船せらる後余等三人は同樓を出で、散歩しつゝ十一時比本船に歸る然るに新たな乗船者は途中の時間には乗船を許さず明日出帆の時刻八時より一時間前ならでは乗り込むを得ずと今に至り如斯ことにては迷惑の次第故「ガリソン」に面談し漸く明日の出帆時迄は「ガリソン」の含みにて乗船を默諾せしむることに諾判を遂げ一統安堵し直ちに乗り込み余は小西鳥居の兩君を導き甲板にて暫時涼を納れ後寢に就けり

九月十八日 曇

本日午前八時出帆小西鳥居兩君全乗十二時迄の進行五十二「マイル」神戸迄残り三百三十五「マイル」船の門司馬關の海峡を通過する際此邊は玄海灘のこと故少動搖をなす余に取りては是迄随分大困難の経験済のこととてさほどに感ぜざりしも鳥居君は少々困難せらるゝ状に見受けたり兩君は晝食も半ばにて止めらる午後に至り靜穩となる余今迄は言語の通ぜざる爲恰も啞にあらすして啞の如く我心に感ぜしまゝを自由に發表する能はざりしが三人同乗の後始めて啞の一時に治せし思ひにて甲板にて涼みながら或は西陣地方の景況談を聞き或は歐州の狀を語りつゝ終日にして盡き余は鳥居君の豫て「アイスグリーム」を嗜好せらるゝを以て一度船中の「アイスグリーム」を全君に進め度思ひ居りしに折悪しく之の兩三日は出さず甚残念に思ひしに圖らず今夕晚餐の際出せり食卓に就くに小西鳥居の兩君は余の左右に居らる日本語にて如何なる談話を爲すも他の人には少しも通ぜざるを

以て茲に至り日本語は大威張りなり余は兩君に「アイスグリーム」出すれば精々多く取られんことを語る食後鳥居君の日はるゝに始めて「アイスグリーム」の眞味を知れりとして非常の賞讃にてありき

九月十九日

本日正十二時和田岬にて暫時碇泊し檢疫を受け夫れより余は甲板に上り海岸を隔る凡一「マイル」手前より双眼鏡にて遙か海岸の光景を眺めしに親族知己の人を始め妻は子供等を連れ海岸に佇立して皆我等乗船の方を凝視せる状一々手に取る如く余は無言の裡に感謝せり斯くする内に船は午後二時神戸の外國棧橋に着す出迎ひの人々に挨拶し後妻子を引拉して船中に誘ひ内部の構造を一々觀覽せしめ次ぎに海岸後藤にて休憩し午後三時四十分三ノ宮發の列車にて全六時〇三分全く京都七條驛に着す數百の歡迎者は余等の一行を圍繞し萬歳聲裡に茶店菊岡屋に至り一々挨拶し小西鳥居兩君と共に無事帰宅す

余の荷物は一應税關を經過せざれば持ち歸る能はざるを以て後藤の手代に托し其手續きを爲さしめ余の後藤を出す時には荷物の半ばは既に税關の手續済みしにより持ち歸り残りは後藤より宅へ直ちに送り附け呉ることとなせり

○神戸にての出迎人左の如し

鳥居喜兵衛様 磯田榮太郎様

右の方々は前日より出向せらる

松室以忠様 吉田善助様 今西平兵衛様 飯田藤次郎様

鳥居長次郎様 石角喜三郎様 久厚會總代 清水長兵衛様

稻畑勝次郎様代 山田九一郎様 玄鶴樓様 清水雪様

井種様 津田源七様 片岡吉之助様 組合書記藤野様

右の方々は當日出向せらる

小西みと様 鳥居いと様 磯田やる様 山田たけ様

(家族)母の まい はつ いま 弥助 徳太郎 周一 又造

右は前日より出向

○出迎に付きての事務分擔

鳥居喜兵衛様 磯田榮太郎様

右神戸出迎に付ての會計其他總取締の主任を爲し呉られたり

久厚會總代 清水長兵衛様

右神戸にての出迎人接待を分任せらる

弥助 又造

右神戸にての出迎人庶務を擔任

久厚會總員

右京都にて出迎人接待並に人力車の配置方擔任

西陣組合事務所員

右菊岡屋にて出迎人受附擔任

出入方并に徒弟總員

右は宅に留守す

右混雜の際故出迎人中貴名漏もあり又事務分擔にも相違の廉あらんなれども幸ひに諒せられんことを

又京都にての出迎人遺漏なく茲に記載すべき筈なれども其際の受附簿を保存することゝなし茲には省略す之れ却つて漏洩を恐るれば也

九月二十日

本日は旅中疲勞の爲終日引籠る早朝より續々新聞記者の來訪に接するも面會せず

九月二十一日

本日早朝日の出新聞記者小谷君來らる依て渡歐中一班の談話をなす本夜木屋街に於て組長松室君に面會し余の報告に付き評議員會并に組合會を開く打合せをなす

九月二十二日

本日は知事市長勸業課長を始め送迎者並に知己の人々を歴訪し挨拶をなす

又未だ渡歐中の人々の留守宅を廻り彼國にて皆無事の由を知りす

其後本月中は陸續來客の面會又は荷物調べ等にて經過す

十月一日

本日自宅に於て歐州各地より購買せし物品を陳列し久厚會々員並に知己人親族等を招き内覽せしむ

十月二日

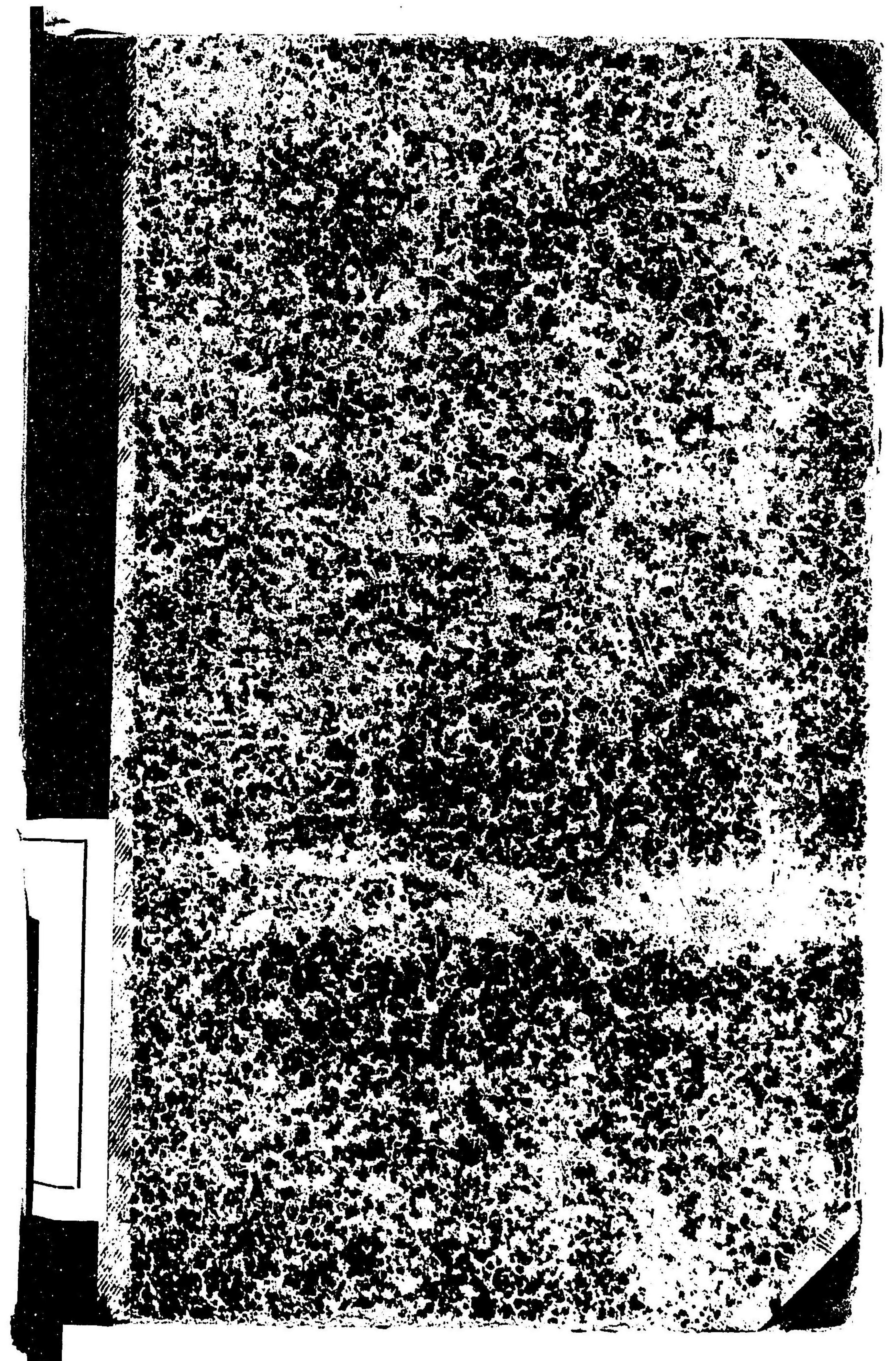
本日組合會開會余は渡歐中に於ける報告をなし尙詳細のことは一回の談話にて盡くす能はず故に他日組合中の各團體に就き改めて談話するの旨を告ぐ

其後各團體より余を招聘す余は詳密なる談話を爲せし際觀察中余の

目撃せし現時外國にて盛んに使用せる「ハンサンダー」器械をして我が西陣に利用せば其効果の大なることを話せしに一統大賛成にて現に全器械五十基并に絞鑿器械を彼國に注文することゝなる
持歸り品の縦覧は其後組合事務所にてなし次ぎに博物館に於て渡歐者の各持ち歸り品を聯合して陳列せり又染織學校は全校製作品を賣却し得るの規則となりしにより即賣陳列會の催あり其節参考品として余の持歸り品を陳列せり

3/35
渡歐日誌終

82
384



026865-000-9

82-387

欧羅巴視察日記

伊達 虎一/著

M34

ADF-0046

